

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.228

2012年5月

平成24年度入学式を挙行



目次

●ニュース

平成24年度入学式を挙行	3
名古屋大学オープンレクチャーを開催	10
中西 聡 経済学研究科教授が日本学士院賞を受賞	10
とよた日本語学習支援システム構築記念シンポジウムを開催	11
平成24年度新任教員研修を開催	11
名古屋大学総長杯高校生柔道大会を開催	12
平成24年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者が決まる	13
第36回経営協議会を開催	13
退職者表彰式及び退職職員懇談会を開催	13

●知の先端

核内有糸分裂：細胞が染色体数を倍加させる仕組み	14
伊藤 正樹（大学院生命農学研究科准教授）	

●教育のデザインとプラクティス

名古屋大学教員メンタープログラムが優秀賞受賞	16
中井 俊樹（高等教育研究センター准教授）	

●知の未来へ

中国をどう見るか—近現代中国ジャーナリズム史を研究して	18
楊 韜（大学院国際言語文化研究科助教）	
「呪術」を通じた人間理解—フィリピン地方都市のフィールドから	19
東 賢太郎（大学院文学研究科准教授）	

●部局ニュース

外部評価（社会的評価）委員会を開催	20
地震火山研究センター年次報告会を開催	20
環境医学研究所動物慰霊祭を挙行政	21
強結合ゲージ理論におけるコンフォーマル対称性に関する国際会議を開催	21
第23回博物館企画展「吉崎 誠海藻コレクション」を開催	22
ミクロの探検隊を開催	23

●環境への取り組み

グリーンベルトを花いっぱい計画	24
-----------------	----

●新名誉教授のことば

●名大を表敬訪問された方々	30
---------------	----

●新たに締結した学術交流協定	30
----------------	----

●構成員を対象とした研修	30
--------------	----

●新任部局長等の紹介	31
------------	----

●資料	35
-----	----

●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成24年3月16日～4月15日	38
---------------------------------	----

●Information	41
--------------	----

●イベントカレンダー	42
------------	----

●ちょっと名大史	
----------	--

近年の名大祭① — 1990年代 —	44
--------------------	----

平成24年度入学式を挙行政





平成24年度名古屋大学入学式が、4月5日(木)、豊田講堂において、大学院は午前9時30分から、学部については、文・法・経済・理・医学部を対象に午前11時から、教育・情報文化・工・農学部を対象に午後1時から、それぞれ挙行されました。

今年度の入学生は、大学院2,307名(修士課程及び博士課程前期課程1,730名、大学院法学研究科専門職学位課程(法科大学院)68名、医学博士課程及び博士課程後期課程509名)及び学部2,247名の計4,554名です。

名古屋大学交響楽団が演奏する「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲(ワグナー作曲)で始まった式典では、濱口総長から、大学院入学生及び学部入学生それぞれに対し、祝辞が述べられました(詳しくは、総

長の辞をご覧ください)。

続いて、各研究科長等の紹介があった後、大学院医学系研究科医学博士課程入学生の金子 慶さんと、文学部入学生の杉浦裕也さん及び工学部入学生の山内貴寛さんが、入学生総代として、入学にあたって学生としての本分を全うすることを宣誓しました。

また、名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎氏(トヨタ自動車株式会社名誉会長)より心のこもった祝辞をいただきました(詳しくは、来賓祝辞をご覧ください)。

引き続き、名古屋大学混声合唱団が、歓迎の歌を合唱し、名古屋大学交響楽団による「威風堂々」(エルガー作曲)の演奏とともに、式典は幕を閉じました。

式典終了後には、学部入学生を対象

として、学生による「入学祭典」と称したサークル紹介が行われました。様々なサークルによる趣向を凝らしたステージパフォーマンスに、会場は大いに盛り上がりました。

終了後、豊田講堂の前庭では、詰めかけた大勢の在學生に部活やサークルの勧誘を受けたり、家族などと晴れやかな表情で記念撮影をしたりする入学生の姿が見られました。

入学式の様子は、IB 電子情報館大講義室、また、本学ホームページ上においてライブ中継され、多くの方々がこの晴れがましい式典に臨みました。

なお、入学式の模様は、現在、本学のホームページ(<http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/publication/movie/>)で視聴することができます。



平成24年度大学院入学式祝辞

名古屋大学総長 濱口 道成

皆さん、名古屋大学大学院へ入学おめでとうございます。名古屋大学大学院は、本日医学修士課程及び博士課程前期課程1,730名、専門職学位課程68名、医学博士課程及び博士課程後期課程509名、総数2,307名の入学生を迎えました。研究を志し、大学院へ進まれた皆さんに、名古屋大学を代表して心から祝福し、歓迎します。

さて、皆さんの入学された名古屋大学は、その創基を、明治4(1871)年に開設された尾張藩の仮病院・仮医学校に遡ります。その後、幾度かの存続の危機を越え、「この名古屋の地に総合大学を」との、地域の人々の活動が結実し、昭和14(1939)年に名古屋帝国大学として創立されました。以来、戦後の復興期、大学紛争期、国立大学法人化と、様々な困難を越え、9学部・14研究科・3研究所からなる大学として今日に至ります。今年、創薬科学研究科が14番目の研究科として新設され、第1期生を今日迎えます。名古屋大学は、明治4年に仮医学校として出発してから141年、総合大学になってから73年を迎え、中部地区で最も古い基幹研究大学です。

さて、名古屋大学は、その歴史からみて、2つの重要な特徴を持っています。

まず第1として、名古屋大学は常に中部・愛知の発展と共にあることです。ご存じのように、中部は日本のモノづくりの拠点、国際的な産業の集積地であります。愛知県の工業出荷額は34兆円で全国1位、製造業従事者は80万人でこれも全国1位です。製造業の出荷品額上位30項目を見ると、11項目で愛知県が全国トップです。このように愛知はまさに日本の産業の心臓部、モノづくりの最後の砦であります。その中にある名古屋大学は、常に中部地区の人材育成を担ってきました。トヨタ自動車の世界一の企業へと育て上げられた豊田章一郎全学同窓会長の他、柴田昌治日本ガイシ株式会社相談役、丹羽宇一郎中国大使をはじめとして、日本の企業をけん引する多くの方々を、名古屋大学は輩出してきました。更に、名古屋大学の研究者には、画期的な発明をされた赤崎 勇先生がいらっしゃいます。赤崎先生は、青色発光ダイオード(青色LED)の発明をされた方です。青色発光ダイオードは、例えば交通信号、ブルーレイディスクや薄型のテレビなど、今では社会の様々な



分野で使われています。しかし、この青色発光ダイオードは、LEDの中でも最も実現不可能な色だとされていました。赤崎先生は、40年の歳月をかけ、粘り強く挑戦し実現しました。この青色LEDがなければ、携帯もiPadもなかったでしょう。更に重要なことは、LEDは今人類が必要としている低炭素社会の実現を可能とする発明であることです。青色LEDがなければ、現代社会は、全く違うものになっていたかもしれません。この業績により、赤崎先生は昨年、エジソンメダルと文化勲章を受章されています。

名大の第2の特徴は、研究者の育成にあります。名古屋大学は、自由闊達な学風を誇り、豊かな人間性を持つ勇氣ある知識人の育成を学術憲章に掲げてきました。2008年、皆さんもご存じのように、名古屋大学の先輩である益川敏英先生と小林 誠先生がノーベル物理学賞を受賞されました。また、下村 脩先生がノーベル化学賞を受賞されました。3人の先生方に先立ち、2001年には野依良治先生がノーベル化学賞を受賞されておられます。21世紀にノーベル賞を受賞した日本人9名のうち4名の方が名古屋大学関係者です。4名の先生方の業績は、名古屋大学の自由闊達な学風が生み出したものとも言えます。このように、皆さんは素晴らしい先輩を持っています。この歴史を誇りとして、皆さんが、素晴らしい先輩たちに続く人材に育っていただくことが、私の心からの願いです。

ところで、今、日本はあまり元気がありませんね。長期にわたる不況の中で東日本大震災を体験し、多額の財政赤字を抱え、超高齢少子化社会に突入しています。少子高齢化とは、日本がいよいよ人口減少社会になるということです。2005年現在で日本の総人口は1億2,777万人ですが、現状の出生率のままなら、2055年には、8,993万人と70%に減少します。更に、15歳から64歳までの労働人口が、2005年の8,445万人から2055年には4,595万人と54%(約半分)に減少することが予想されています。今の時代を



とで振り返るならば、我々は、明治、戦後に続く日本の転換点に生きているのかもしれません。日本という国が、活気を持った存在として存続できるかどうか、今試されているのです。その中で、日本のモノづくりの心臓部である愛知の役割は大変大きいのです。また、大学が、どのような人材を育成していくのか、日本の未来を切り拓く研究・開発をどう展開するのか。「国際化」、「秋入学」、「グローバル人材育成」という言葉の示すように、今、大学に改革の期待が投げかけられています。言い換えれば、産業の中核地帯にある日本の基幹大学・名古屋大学の真価が問われている時代が来たともいえます。だからこそ、君たち、名古屋大学大学院に入学した諸君の、新しい発想と、努力と、そして何よりも決意が期待されるのです。厳しい財政状況ではありますが、名古屋大学は皆さんの研究を支援するため、様々な取り組みを行っています。例えば、大学院修了後優秀な成績を上げた人を、YLC (Young Leaders Cultivation) というプログラムで教員として採用しています。君たちが存分に力を発揮し、活躍し、名古屋大学の先輩たちに続く国際人として育てていただくことが、私の心からの願いです。



さて、大学改革の期待に応えるために、名古屋大学は、「名古屋大学から Nagoya University へ」を目標に掲げ、国際化を図っています。現在1,700名を超える留学生を受け入れ、270の大学・研究機関との間で学術交流協定を結び、法政国際教育協力研究センター、医学部の YLP (Young Leaders Program)、農学国際教育協力研究センターやグローバル COE プログラム、リーディング大学院などを通じて、大学院の国際的な人材育成を図っています。この活動の中から、アジア各国の次官や副大臣、官房副長官等、若いリーダーが多数育っています。素晴らしい事ですね。また「秋入学」が問題になっていますが、名古屋大学は、既に昨年からの秋入学、すべての授業を英語で行うグローバル30を開始しています。今、大学は小さな国際社会なのです。

「名古屋大学から Nagoya University へ」、これが私たちの大学改革の目標であります。皆さんの名古屋大学大学院での生活が、世界へ大きく視野を広げ、国際人として育つ契機となることを願い、私の本日の祝辞といたします。

ご入学おめでとう。



平成24年度学部入学式祝辞

名古屋大学総長 濱口 道成

皆さん、名古屋大学へ入学おめでとうございます。本日ここに、2,247名の皆さんを名古屋大学へ迎えることとなりました。厳しい受験勉強を経験した君たちの入学を、心から祝います。入学おめでとう。

入学にあたり、名古屋大学の歴史を少しお話しします。名古屋大学は、その元を、明治4(1871)年に開設された尾張藩の仮医学校に遡ります。明治時代に、幾度かの存続の危機を越えて、昭和14(1939)年に名古屋帝国大学として創立されました。以来、戦後の復興期、大学紛争期、国立大学法人化と、様々の困難を越え、9学部・14研究科・3研究所からなる大学として今日に至ります。今年は、創業科学研究科が14番目の研究科として新設されました。名古屋大学は、仮医学校から数えて141年、名古屋帝国大学ってから73年を迎える、日本の代表的な基幹研究大学です。

さて、名古屋大学は、その歴史からみて、2つの重要な特徴を持っています。

まず第1として、名古屋大学は常に中部・愛知の発展と共にあることです。ご存じのように、中部は日本のモノづくりの拠点、国際的な産業の集積地であります。愛知県の工業出荷額は34兆円で全国1位、製造業従事者は80万人でこれも全国1位です。製造業の出荷品額上位30項目を見ると、11項目で愛知県が全国トップです。このように愛知はまさに日本の産業の心臓部、モノづくりの最後の砦であります。その中にある名古屋大学は、常に中部地区の人材育成を担ってきました。トヨタ自動車を世界一の企業へと育て上げられた豊田章一郎全学同窓会長の他、柴田昌治日本ガイシ株式会社相談役、丹羽宇一郎中国大使をはじめとして、日本の企業をけん引する多くの方々を、名古屋大学は輩出してきました。更に、名古屋大学の研究者には、画期的な発明をされた赤崎 勇先生がいらっしゃいます。赤崎先生は、青色発光ダイオード(青色LED)の発明をされた方です。青色発光ダイオードは、例えば交通信号、ブルーレイディスクや薄型のテレビなど、今では社会の様々な分野で使われています。しかし、この青色発光ダイオードは、LEDの中でも最も実現不可能な色だとされていました。赤崎先生は、40年の歳月をかけ、粘り強く挑戦し実現しました。この青色LEDがなければ、携帯もiPadもなかつ



たでしょう。更に重要なことは、LEDは今人類が必要としている低炭素社会の実現を可能とする発明であることです。青色LEDがなければ、現代社会は、全く違うものになっていたかもしれません。この業績により、赤崎先生は昨年、エジソンメダルと文化勲章を受章されています。このように、皆さんは素晴らしい先輩を持っています。この歴史を誇りとして、皆さんが、素晴らしい先輩たちに続く人材に育っていただくことが、私の心からの願いです。

名大の第2の特徴は、研究者の育成にあります。名古屋大学は、自由闊達な学風を誇り、豊かな人間性を持つ勇氣ある知識人の育成を学術憲章に掲げてきました。2008年、皆さんもご存じのように、名古屋大学の先輩である益川敏英先生と小林 誠先生がノーベル物理学賞を受賞されました。また、下村 脩先生がノーベル化学賞を受賞されました。3人の先生方に先立ち、2001年には野依良治先生がノーベル化学賞を受賞されておられます。21世紀にノーベル賞を受賞した日本人9名のうち4名の方が名古屋大学関係者です。先生方の業績は、名古屋大学の自由闊達な学風が生み出したものとも言えます。さて、この「自由闊達な学風、勇氣ある知識人」、覚えておいてください。これはどんな意味を指すのでしょうか。入学式の宿題です。この意味を考えてみてください。益川先生のお話の中にヒントがあります。

さて今日私は、皆さんに聞きたい事があります。皆さんは、大学ではどんな勉強をするつもりでしょうか。大学の勉強は、高校までの勉強と大きく変わります。勿論、授業に出席する、試験に通るということは、高校までの勉強と同じです。では、何が違うのか。それは、大学での勉強は、社会人として自立する準備をするための勉強である事です。大学の4年間は、短い期間ですが、自分がどんな人間になり、どんな生涯を描くかの設計図を作る、人生でもっとも大切な時期であるからです。そこで、皆さんにいくつ



かお願いがあります。第1に皆さんに心がけていただきたいことは、「自立すること」です。自立するために何が必要か。まず、孤独を知ること、人はひとりで生きなくてはならないことを実感することです。そのためには下宿が必要かもしれませんね。2つ目、いろんな事に挑戦してください。失敗を恐れないで挑戦して下さい。それから3つ目として、大学の間に幅広く深い教養を身につけることを心がけてください。どうすればよいか。簡単です。長い時代を生き抜いてきた古典を原典から学んで下さい。100年、1,000年の時間を生き抜いてきた情報は、間違いのない良質の情報です。私は工学を学ぶ、私は理学部で分子生物を勉強すると今考えている人も、自分の専門外の哲学、古典文学、歴史をしっかりと学んでいただきたい。その勉強は、皆さんの血となり肉となる知恵、生涯生きる知恵をもたらします。

もう1点。しっかり語学を学んでください。自分を語ることでできる、日本文化の素晴らしさを語ることでできる能動的な語学力を身につけてください。そして、大学の間に海外に出かけてください。孤独に耐えながら、自分の英語が通じるか、実際に試してください。失敗を恐れずに、挑戦をしてください。そして、多様な文化、価値観の違いを実際に体験し、将来国際的な活動ができるよう、自分の判断力を養ってください。

最近、秋入学という言葉が話題になっています。なぜでしょうか。それは、世界が、国境を越えて人や物が行き交う時代、グローバル化の時代となっているからです。40年前、私が、名大生のころ、留学生は大学全体で15名程度でした。今は、1,700名を超え、全体の1割となりました。25年前、私が、助教授のころ、アメリカに手紙を送り、返事をもらうには1ヶ月かかりました。今はe-mailで連絡すると、会話しているようなものですね。この流れは、今後ますます加速するでしょう。あなた方が卒業し、



就職した時、語学、特に英語は必須の能力となります。今、私たちは「名古屋大学から Nagoya University へ」を標語に、名古屋大学をさらに国際化するため、改革に取り組んでいます。昨年、秋入学、すべての授業を英語で行う G30 プログラムを始めました。また、名古屋大学の英語教育を大きく変えています。TOEFL-ITP 試験をもう受けられたでしょう。結果でクラス分けをしますが、survival course の方は必死で頑張ってください。英語力の大きく伸びた人は、総長表彰します。また高い英語力を持っている人は、海外留学していただきます。くり返しますが、在学中に、海外に出かけ、孤独の中で、自分の本当の力、語学力、交渉力を試してください。そして多様な文化を体験してください。その体験は、きっと君たちの将来を助けるものとなります。将来、国際人として活躍する目標をもってください。

今日、皆さんに申し上げた事をまとめると、まず自立を心がける事、いろんな事に挑戦する事、古典を学ぶ事、そして語学を磨き、海外に出かけ、多様な文化を体験する事。これが、入学式にあたって、私からの皆さんへのお願いです。皆さんの学生生活が、多くの出会いと、実り多い体験に満ちることを願って今日の祝辞とさせていただきます。入学おめでとう。

来賓祝辞（大学院入学式）

豊田 章一郎 名古屋大学全学同窓会会長
トヨタ自動車株式会社名誉会長

ただ今ご紹介いただきました名古屋大学全学同窓会会長の豊田章一郎でございます。全学同窓会を代表いたしまして、一言お祝いを申し上げます。まずは、めでたく名古屋大学大学院にご入学されましたことを、心からお祝い申し上げます。

皆さんは、本日から大学院生としてさらなる学業を励まれることになりました。ただ今、濱口総長からのいろいろなお話がございましたように、名古屋大学は現在、濱口総長のリーダーシップのもとで世界に通用する人材の育成や、世界トップレベルの研究推進などを進めておられます。たとえて申しますと、アジアを中心に世界70カ国以上の国々から留学生を積極的に受け入れておられますが、留学生は現在の1,500人強から、5年間で2,000人強を目指して取り組みを進めておられます。さらに海外の大学との連携や交流の拡大、そして日本の学生の国際性を育む特色のある教育プログラムの実践などを精力的に推進しておられます。本年もアジアからたくさんの留学生の方が入学されておりますが、とりわけアジアに強い基盤を持つ特長のある大学となっております。

また創立以来、こんにちまで脈々と受け継がれてきております独創性豊かで自由闊達、清新な学風は、多様性を供与し、自主独立の個性を尊重するものでございます。将来のリーダーとしての役割が期待されている皆さんには、このような名古屋大学の恵まれた環境や強みを自分のものとして、しっかりと生かしていただきたいと思っております。そのためにも決して内向きにならず、国際情勢など常に外に目を向けて、謙虚な姿勢で学び、大きな夢、高い志を持ち、新たな発想と行動で存分に力を発揮され、活躍されることを期待しております。特に皆さんには、失敗を恐れず、汗



をかきながら愚直にやり抜く姿勢が何よりも大切であると思います。

さて、皆さんは本日から全学同窓会の一員となられます。全学同窓会は内外に支部を持っているのが特長でございます。現在までに国内には関東支部と関西支部、及び浜松を中心とした遠州会の3つの支部が設けられております。また海外には名古屋大学で学ばれました留学生の方々が中心となりまして、韓国、バングラデシュ、また中国では上海と北京、タイ、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタンに加えまして、昨年7月に10番目の支部としまして台湾支部を設立いたしております。今後、名古屋大学がアジア地域との関係強化を図る際の拠点としまして、これらの同窓会支部を活用していただければと思っております。そして名古屋大学が研究、教育、社会貢献の各方面で、日本はもとより世界屈指の大学となるように、皆さんと一緒に活躍していただくことを希望いたしております。どうぞよろしくお願いをいたします。

本日は本当におめでとうございました。



来賓祝辞 (学部入学式)

豊田 章一郎 名古屋大学全学同窓会会長
トヨタ自動車株式会社名誉会長

ただ今ご紹介をいただきました名古屋大学全学同窓会の会長の豊田章一郎でございます。全学同窓会を代表いたしまして、一言お祝いを申し上げます。まずは、めでたく名古屋大学にご入学されましたことを、心からお祝いを申し上げたいと思います。

さて、皆さんは今、大変フレッシュな気持ちでこの場に集まっておられると思います。私も皆さんの若さや緊張、気概を感じまして、非常にさわやかな気持ちであります。これから新たに大学生活に入られる皆さんは、大きな夢や期待を胸に、新しいことにどんどんチャレンジしていこうと思っておられることであらうでしょう。名古屋大学には総合大学として、自然科学から社会科学、人文科学まで、いずれも全国トップレベルの教授陣を擁しまして、充実した魅力ある講座が揃っております。さらに創立以来、独創性豊かで自由闊達、清新な学風は、良き伝統として、こんにちまで脈々と受け継がれております。そして現在、名古屋大学は濱口総長のリーダーシップのもと、ただ今お話がございましたように、国際化に対応した大学づくりを進めておられます。皆さんにはこのような名古屋大学の恵まれた教育環境を自分のものとして生かし、世界の中の日本という視点で、常に視野を広く持って、現状に安住することなく、高い目標を掲げて行動し、知力、体力、気力の充実を図っていただきたいと思います。そして将来のリーダーとして求められる志や心というものをしっかりと身に付けていただきたいと思います。

さて、皆さんは、こんにちから名古屋大学全学同窓会の準会員とされます。全学同窓会は内外に支部を持っているのが特長でございます。現在までには、国内に関東支部や関西支部、及び浜松を中心とした遠州会の3つの支部が



設立されております。また海外には名古屋大学で学ばれた留学生の方々を中心としまして、韓国やバングラデシュ、また中国では上海と北京、タイ、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン、また昨年7月には10番目の支部として、台湾支部を設立いたしております。今後、名古屋大学がアジア地域との関係強化を図る拠点として、これらの同窓会支部を活用していただければと思っております。そして名古屋大学が研究、教育、社会貢献の各方面で、日本はもとより世界屈指の大学となれるように、皆さんと一緒に活動していきたいと希望しております。どうぞよろしく願いいたします。

今後これから勉強されるにあたり、いろいろと困難なこともあると思いますが、一つ身体には十分気を付けて、立派な学生になっていただきたいと思っております。

本日は本当におめでとうございます。



名古屋大学オープンレクチャーを開催

名古屋大学オープンレクチャーが、3月23日(金)、東山キャンパスにおいて開催されました。

同レクチャーは、本学の研究者が少人数の講義スタイルで一般の方を対象に自身の研究をわかりやすく説明するもので、今回初めて企画されました。当日は、雨天にもかかわらず158名(登録者数は210名)の参加者が野依記念学術



講義の様子

交流館カンファレンスホールに集まりました。

まず、渡辺副総長のあいさつ、広報室による大学概要説明及び大学紹介DVDの視聴があり、その後各教室に分かれ、講義を受けました。講義時間は概ね1時間を予定していましたが、活発な質疑応答が繰り返され、予定時間を1時間以上超過する講義もありました。講義終了後の参加者によるアンケート結果では「受講した研究への理解は深まりましたか」との設問に、93%の方が深まったと回答し、一般の方に研究内容をわかりやすく伝えるという同レクチャーの主目的を達成することができました。

なお、今回開講された講義は、「脳の柔らかさのはなし」(門松健治医学系研究科教授、北川裕之神戸薬科大学教授)、「血管再生医療のはなし」(室原豊明医学系研究科教授)、「光で形のかわる色素のはなし」(関 隆広工学研究科教授)、「磁気ディスクにおける潤滑技術のはなし」(張 賀東情報科学研究科准教授)、「アジア高山域における氷河のはなし」(坂井亜規子環境学研究科特任助教)、「廃熱から電気を生み出す材料のはなし」(竹内恒博エコピア科学研究所准教授)、「植物ホルモンで新しいイネを作るのはなし」(上口美弥子生物機能開発利用研究センター准教授)の7つです。

中西 聡経済学研究科教授が日本学士院賞を受賞

中西 聡経済学研究科教授が、日本学士院賞を受賞しました。同賞は、学術上功績顕著な科学者を優遇するための機関として文部科学省に設置され、学術の発展に寄与するため必要な事業を行うことを目的とする日本学士院が、学術上特にすぐれた論文、著書その他の研究業績に対し授賞するものです。



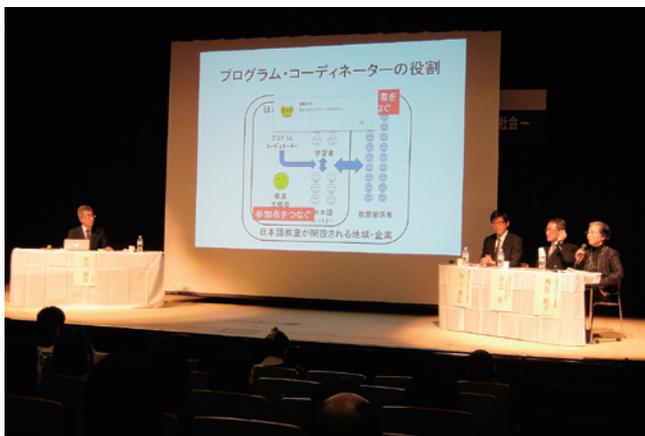
中西教授

今回の授賞対象となった研究題目は、「海の富豪の資本主義-北前船と日本の産業化」です。中西教授は、19世紀から20世紀初頭にかけて北海道で生産された鮮肥料が日本海沿岸航路を経て北陸・近畿に運ばれ、農業生産を発展させた歴史を研究してきましたが、著書『海の富豪の資本主義-北前船と日本の産業化』(名古屋大学出版会、2009年11月刊行)では、日本海沿岸航路で活躍した北前船と呼ばれる帆船の船主が地域間の価格差を利用して巨大な商人的利益をあげ、その利益を出身地の地域経済の近代化に投下した事実を、主要な船主が残した膨大な経営帳簿の分析を通じて数量的に明らかにしました。その結果、もっぱら海運業の拡大に力を注いだ船主や、近世大名との結びつきに強く依存した船主は、近代においても出身地経済との関係が乏しく、近世期から出身地経済との関係が深かった船主が、近代に入ってから出身地域で多くの会社・銀行を設立したことを実証しました。

これは、従来分離されがちであった近世経済史と近代経済史の研究を結合し、近代日本の産業化を支えた重要な資金提供者の実態を歴史的に初めて究明した画期的業績です。

とよた日本語学習支援システム構築記念シンポジウムを開催

とよた日本語学習支援システム構築記念シンポジウム「多文化共生社会をめざして－日本語学習支援が創る地域社会－」が、3月28日(水)、豊田産業文化センターにおいて、豊田市との共催で開催されました。同システムは、多文化共生社会への寄与を目的とした包括的な日本語学習支援の仕組みで、平成20年度より留学生センターが豊田市か



パネルディスカッションの様子

ら委託を受け、その構築、運用、普及に取り組んできました。

シンポジウムには約200名が来場し、太田稔彦豊田市長、杉山理事のあいさつで幕を開けました。

第1部では、池上重弘静岡文化芸術大学教授から「多文化共生社会をめざして－国と地方の動向」と題した基調講演、早川俊章文化庁文化語課長から「『生活者としての外国人』のための日本語教育」施策の報告がありました。また、北村祐人留学生センターシステム・コーディネータ、村上京子同センター教授が、4年間にわたる同システムの構築と運営の成果報告を行いました。

第2部では、池上教授、井上 洋日本経済団体連合会社会広報本部長、西原鈴子元東京女子大学教授をパネリストに迎え、衣川隆生同センター准教授をコーディネータとして、「日本語学習支援における『連携』を語る」と題したパネルディスカッションが行われました。日本語学習支援の仕組みの普及を図る上で見えてきた課題を共有し、それを解決していくために産学官民がどのような連携ができるのかについて活発な討論が行われました。

平成24年度新任教員研修を開催

平成24年度新任教員研修が、4月6日(金)、野依記念学術交流館において開催されました。

同研修は、本学の教員として各種職務の遂行に必要な基本的知識を得ることを目的とし、平成23年4月2日(土)以降に本学に着任した教員及び週40時間以上勤務する研究員を対象に開催したもので、今回の参加者はちょうど100名



懇親会の様子

でした。

昨年度までの同研修では、服務規程やリスク管理についての注意事項が中心でしたが、今回からは「新任教員を歓迎する会」という方針に大きく転換しました。最初に濱口総長から歓迎スピーチがあり、本学の歴史や伝統について詳しい紹介がありました。ランチタイムは名古屋大学消費生活協同組合の協力を得て、会費制の懇親会を催し、また、学内からの30件近いポスター展示、研究支援に関するセミナー、国際化対応に関するセミナー、授業改善ワークショップの3つのセミナーを実施し、満足度に関する受講者アンケートでは、昨年度を大きく上回る結果が得られました。

なお、新任教員が本学に着任して各種手続きを行い、研究室を整備し、教育・研究活動をスタートするために必要な情報を整理した、『名古屋大学新任教員ハンドブック』を制作しました。同ハンドブックはウェブサイト (http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/file/handbook_final.pdf)でもご覧頂くことができます。

名古屋大学総長杯高校生柔道大会を開催

名古屋大学総長杯高校生柔道大会が、3月20日(火)、愛知県武道館において、本学柔道部の主催により開催されました。

これは、昨年度、本部学生生活委員会において「名古屋大学総長賞の授与に関する取扱要項」が制定され、事前の審査を経て、運動部等が主催する大会で総長賞を授与でき



濱口総長より総長杯を授与される半田高校の選手

るようになったことを受けたもので、本学総長の名前を冠するスポーツ大会は今回が初めての開催となります。今回は初の大会ということもあり、濱口総長が観戦しました。

大会には、東海地方で本学への入学者を数多く輩出し、文武両道を旨とする14の高等学校（旭丘、一宮、岡崎北、菊里、岐阜、向陽、五条、関、滝、東海、豊田西、西春、浜松北、半田）が招待されました。

男子は5名の団体戦、女子は体重無差別の個人戦で、いずれも予選リーグと決勝トーナメントで優勝が争われました。

総勢100名以上が総長杯を目指して熱戦を繰り広げ、男子は半田高校、女子は旭丘高校1年生の林田悠希さんが優勝し、総長より総長杯が手渡されました。

平成24年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者が決まる

平成24年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者が決定し、本学から2名が受賞しました。

この表彰は、科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を取めた者について、その功績を讃えることにより、科学技術に携わる者の意欲の向上を図り、我が国の科学技術水準の向上に寄与することを目的としており、「科学技術賞(開発部門、研究部門、科学技術振興部門、技術部門、理解増進部門)」、「若手科学者賞」、「創意工夫功労者賞」、「創意工夫育成功労学校賞」の各賞に分かれています。

なお、受賞式は、4月17日(火)、文部科学省において、執り行われました。

受賞者は以下のとおりです。

■若手科学者賞

受賞者：佐藤 浩太郎 工学研究科准教授
業績名：機能性高分子創出に向けた精密重合の研究

受賞者：廣井 悠 減災連携研究センター准教授
業績名：災害対策に関する個人の行動モデルとその応用に関する研究

第36回経営協議会を開催



会場の様子

第36回経営協議会が、3月27日(火)、鶴舞地区にある鶴友会館において開催されました。

会議では、濱口総長からのあいさつの後、平成24年度学内予算、平成24事業年度における長期借入金の借入れ及び償還計画等、人事関係諸制度の見直し、平成24年度計画、本学が保有している宿泊施設の有効活用、新執行部の職務分担等について、総長、各担当理事、副総長からそれぞれ説明が行われ、審議の結果、了承されました。

次いで、平成24年度入学者選抜実施状況、防災推進本部の設置、細胞生理学研究センターの設置、ナショナルコンポジットセンターの設置、名古屋大学基金の寄附状況、平成23年度施設整備状況について報告が行われました。

外部委員の方々からは、平成24年度計画、人事関係諸制度、東海地区国立大学共同中津川研修センターの有効活用に関して貴重な意見が寄せられました。

退職者表彰式及び退職職員懇談会を開催



あいさつする総長

名古屋大学退職者表彰式が、3月29日(木)、豊田講堂第1会議室において挙行されました。

これは、平成24年3月31日付けで退職する勤続30年以上の職員を表彰するもので、表彰式には、被表彰者34名のうち32名の方が出席し、濱口総長から被表彰者一人ひとりに表彰状と記念品が手渡されました。

続いて、総長から祝辞があり、永年にわたる本学への尽力に対する感謝のことが述べられました。

引き続き、ユニバーサルクラブにおいて、名古屋大学退職職員懇談会が開催され、上記の被表彰者のほか、3月31日付けで定年により退職する職員をはじめとした関係者が出席しました。総長のあいさつの後、退職者を代表して青山正晴医学部・医学系研究科事務部長から謝辞が述べられました。退職者は、出席者と今日までの思い出などを語り、別れを惜しんでいました。

核内有糸分裂：細胞が染色体数を倍加させる仕組み

伊藤 正樹 大学院生命農学研究科准教授

細胞1個あたりの染色体の数は、通常の細胞分裂によって変化することはないため、体を構成する細胞はどれも同じ数の染色体を持っています。ヒトの細胞なら46本、ショウジョウバエなら8本です。しかし、一部の細胞では、この規則から外れて、通常の細胞の2倍あるいは4倍の数の染色体を持つことが知られています。このような染色体数の倍加は、一般に核内有糸分裂（エンドマイトーシス）と呼ばれる特殊な細胞周期によって引き起こされます（図1）。通常の細胞分裂では、染色体の複製と有糸分裂からなるサイクル（細胞周期）が1回転することにより、複製された染色体が2つの娘細胞に均等に分配されます。しかし、核内有糸分裂では、染色体が分離した後、何らかの原因により有糸分裂を完了することができず、結果的に一度分離した染色体が1つの核を形

成することになります。このとき、細胞自体の分裂（細胞質分裂）も生じないため、通常の体細胞が核内有糸分裂を起こすと、染色体数が倍加した細胞（倍数体細胞）が生じることになります（図1）。ヒトでは巨核球（megakaryocyte）と呼ばれる血小板を生産する細胞が倍数体細胞であり、この細胞が発生する過程で核内有糸分裂が起きることが知られています。植物でも一部の特殊な組織では核内有糸分裂により倍数体細胞が生じると言われています。核内有糸分裂は1939年に著名な細胞学者 Lothar Geitler によってアメンボの一種に見いだされて以来、多くの動物や植物に確認されていますが、1970年以降は研究対象としてあまり脚光を浴びることはありませんでした。

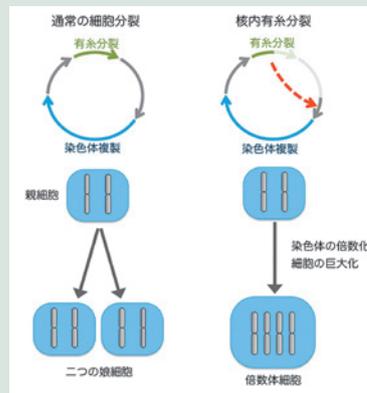


図1 通常の細胞分裂と核内有糸分裂の比較
通常の細胞分裂は、染色体複製と有糸分裂からなるサイクル（細胞周期）を1回転させることにより引き起こされるが、核内有糸分裂（エンドマイトーシス）では、有糸分裂を完了しないまま、次のサイクルに進んでしまう。これにより、染色体数の倍加とそれに伴う細胞の巨大化が起きる。

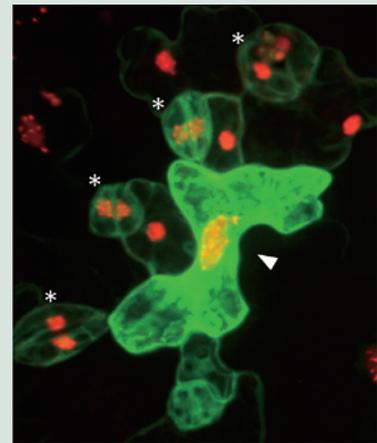


図2 gig1変異体の葉に生じる巨大細胞
シロイヌナズナから単離されたgig1変異体の葉では、通常の孔辺細胞（*で示している）よりも巨大な細胞（矢頭で示している）が生じる。この巨大細胞の核は通常の孔辺細胞の核よりも大きく、染色体の数も倍加している。緑色の蛍光は孔辺細胞に特有な遺伝子の発現を示している。赤色の輝点は染色体の一部（動原体）を示しており、輝点の数が染色体の数に相当する。

私たちはモデル植物シロイヌナズナを材料にして、細胞分裂に異常を持つ突然変異体の選抜を行い、核内有糸分裂により体細胞が高頻度で倍数化する突然変異体 *gig1* を単離しました。*gig1* 変異体の葉では、巨大な孔辺細胞が生じており、この巨大細胞の染色体数を調べると、通常の10本ではなく20本存在していることがわかりました(図2)。また、葉の表皮細胞をライブセルイメージングにより解析して、実際に核内有糸分裂が起きる過程を動画として捉えることに成功しました(図3)。この変異体の異常は一つの遺伝子が機能を失ったために生じたものですが、この遺伝子

(*GIG1*) を単離して詳しく解析した結果、有糸分裂の開始や進行を促す特定のタンパク質の分解を制御するはたらきを持つことがわかりました。有糸分裂の制御に関わる一部のタンパク質は、有糸分裂の特定の時期にユビキチンと呼ばれる小さなタンパク質が付加され、これが目印となって細胞内のタンパク質分解装置によって速やかに分解されることが知られています。このとき、ユビキチンの付加を担っているのが、後期促進複合体(anaphase-promoting complex, APCと略)です。*GIG1*はこのAPCに結合することにより、そのはたらきを妨げる機能をもつこと、すなわちAPC阻害タンパク質としてはたらくことを明らかにしました。APCは進化的に保存されたタンパク質複合体ですが、*GIG1*は植物以外の生物には見いだすことができず、植物に特有な細胞分裂の制御に関わっていると考えられます。おそらく、植物

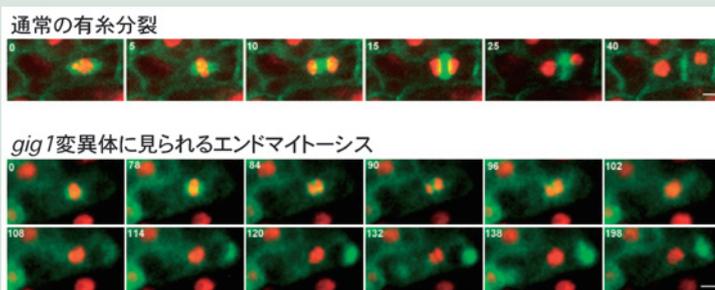


図3 通常の細胞分裂と核内有糸分裂のライブイメージング
野生型植物の葉における細胞分裂と、*gig1* 変異体の葉で見られる核内有糸分裂の様子をライブイメージングにより連続観察した。赤色の蛍光は染色体を、緑色の蛍光は分裂装置を形成する細胞内骨格(微小管)を示している。通常の細胞分裂では、染色体の分離と極への移動が起き、染色体は2つの娘細胞に均等に分配される。一方、核内有糸分裂では染色体は分離した後、極への移動が起きず、最終的に1つの核となり、細胞自体の分裂も起きない。数字は経過時間(分)を表している。

は *GIG1* のはたらきをコントロールすることにより、核内有糸分裂を起こす部位を限定して、特殊な細胞だけを倍数化させているのではないかと考えられます。

一般に細胞のもつDNA量と細胞のサイズには正の相関があることが知られています。実際、植物の倍数体細胞は通常の細胞よりも大きく、その結果、葉や花などの器官も倍数化により大きくなることが知られています。*GIG1*のはたらきを植物の発生過程で人為的にコントロールすることができれば、倍数体細胞が生じる部位を制御することにより、特定の器官だけを倍数化させて巨大化させることができるかも知れません。そして、このような制御が可能になれば、果実だけが大きくなるサクランボや、実の部分が大きなトウモロコシなど、有用な部位だけを大きくすることで、食料生産やバイオ燃料の生産などに寄与できる可能性があります。

1988年東北大学理学部生物学科卒業、1993年東北大学大学院理学研究科生物学専攻中退の後、同年名古屋大学農学部生化学制御研究施設助手に就任し、1994年東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻助手を経て、2003年より名古屋大学大学院生命農学研究科准教授、現在に至る。博士(理学・東北大学)。1998年~2000年日本学術振興会海外特別研究員(英国ジョンネズセンター)。
好きな言葉: 青は藍より出でて藍より青し
抱負: オリジナルな研究で植物細胞が分裂する仕組みを極める

いとう まさき



名古屋大学教員メンタープログラムが優秀賞受賞

中井 俊樹 高等教育研究センター准教授

1. メンターが必要となる背景

みなさんは、初めて就職した時のことを覚えていますか。これから始まる仕事に対してワクワク感とともにドキドキ感もあったのではないのでしょうか。着任間もない新任教員にとって、大学における活動に不安はつきものです。特に近年では、競争の激化、人件費の削減、任期制の導入など大学教員職の不安定化が進んでおり、新任教員がもつ不安は以前よりも大きくなっていると言えるでしょう。

制度面ではファカルティディベロップメントが大学設置基準により義務化され、新任教員が教員としての資質を向上する機会は増加しています。しかし、研修の多くは集合研修であり、個々の多様なニーズを踏まえた支援が十分ではありません。さらに、厳しい大学教員市場の中で新任教員の心理的支援も大きな課題と言えます。

このような現状では、新任教員にとってキャリアを築く上で相談することができる先輩、つまりメンターと出会えることができるかどうか重要な意味を持つのではないかと私は思います。

2. 教員メンタープログラムの特徴

名古屋大学では、2005年より教員メンタープログラムを実施しています。教員メンタープログラムは、大学において一定の職務経験をもつ教員と交流することで、新任教員が大学教員として成長していくことを支援する取り組みです。このプログラムでは、新任教員をメンティ教員、そのメンティ教員を支援する教員をメンター教員と呼びます。事務局を担当している組織は、高等教育研究センターと男女共同参画室です。

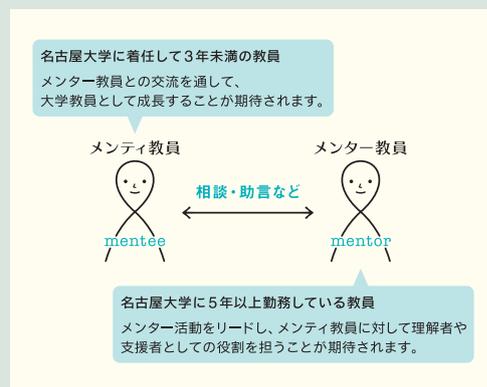
名古屋大学の教員メンタープログラムでは、教

員の主体性を重視しています。新任教員といっても30歳以上の者が大半であり、キャリアやネットワークをつくるのは第一義的には新任教員自身の課題であるということを前提としています。事務局はマッチングや支援などは行いますが、活動の目標や方法などはメンター教員とメンティ教員の間で主体的に決めています。つまり、日常的な自然発生的な非公式な先輩後輩の関係性を取り入れた形で運営しています。

メンター活動は、申し込み、マッチング、初回のミーティング、定期的な活動、フィードバックという流れで構成されます。メンター教員およびメンティ教員がメンター活動を効果的に進めるために、「メンター教員のためのガイド」および「メンティ教員のためのガイド」も用意されています。

3. プログラムの成果と展望

基本的には自由参加のプログラムですが、メンタープログラムの意義が着実に浸透し、利用者は年々増加しています。2011年度は28名の新任教員



メンタープログラムの概要

がプログラムに申し込みました。

2011年11月に実施したアンケートによると、メンティ教員にとって、悩みを解決できた、教育や研究を進める上でアドバイスをもらえた、学内のネットワークができたなど、さまざまな面での効果が見られています。一方、メンター教員にとっても、若手から刺激を得られた、自身の過去を振り返りかえり前向きな気持ちになれたなどのコメントが寄せられています。

さらに、教員メンタープログラムの運営が評価され、ワーキングウーマン・パワーアップ会議の「メンター・アワード2012」の優秀賞を受賞しました。表彰式は2012年2月24日に女性就業支援センターにおいて開催されました。



メンター・アワード2012表彰式の様子

メンタープログラムという支援のあり方は、大学の中で今後発展する可能性があるとは考えています。新人看護師に先輩看護師がサポーターとして支援する附属病院の制度も、一種のメンタープログラムと言えるでしょう。また、諸外国では学長や学部長などの役職者にメンターを配置する大学もあります。

最後にお願ひです。教員メンタープログラムは、協力していただける先輩教員がいることで運営できる取り組みです。「メンターをお願いできませんか」と尋ねられたら、ぜひ前向きなお返事をいただければと思います。

教員メンタープログラムのサイト

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/fd/mentoring/>

<http://www.kyodo-sankaku.provost.nagoya-u.ac.jp/mentoring/>

1 申し込み

名古屋大学に着任して3年未満の教員であれば、申し込みは随時可能です。申し込みの際に、日程上の都合、メンター活動への期待や希望などを記します。

2 マッチング

メンティ教員の希望やプロフィールをもとに適切なメンター教員を決定します。メンター教員より初回のミーティングに関する連絡が届きます。

3 初回のミーティング

メンター活動の目的、ミーティングの場所と頻度などの活動の計画を相互で確認します。

4 定期的な活動

ミーティングのみでなく、キャンパスツアー、授業見学などの活動も相互の合意の上で進められます。またプログラム事務局にはいつでも相談することができます。

5 フィードバック

メンター活動の成果をプログラム事務局に報告します。内容はプログラムの改善に利用されます。

メンター活動の流れ

専門は大学教育論。1998年に高等教育研究センター助手となり、講師、助教授を経て現職。2010年より男女共同参画室室員を兼務。教員メンタープログラム事務局担当。主な著書として、『成長するティップス先生』（共著、玉川大学出版部、2001年）、『大学教員のための教室英語表現300』（編著、アルク、2008年）、『大学教員準備講座』（共著、玉川大学出版部、2010年）、『大学の教務Q & A』（共編著、玉川大学出版部、2012年）がある。今年も学内でチームをつくりスズカエンデューロ（自転車のイベント）に参加予定です。

なかい としき



楊 韜
大学院国際言語文化研究科助教

中国をどう見るか―近現代中国ジャーナリズム史を研究して

この文章を書く少し前に、「はるかなるシルクロード鉄道～中国横断2600キロの旅～」というテレビ番組を観ました。それは日中国交正常化40周年記念特別番組でした。20年以上前に放送されたNHKのドキュメンタリー番組「シルクロード 丝绸之路」をはじめて観た時の感動は蘇りました。やはり歴史ほど人々に深い感銘をあたえるものはほかにないと思います。

私の専門分野は中国近現代史ですが、主にメディア／ジャーナリズム論の視点から中国社会の動きを考察しています。これまでは、近代中国のジャーナリスト鄒韜奮及び彼が経営する生活書店を中心に、近代中国のジャーナリズム史について研究してきました。生活書店は、1920年代から1940年代にかけて、とりわけ日中戦争期において、当時の世論に大きな影響をもたらした出版機構です。生活書店は、戦後新知・読書の両出版機構との合併を経て、中国の大手出版機構の一つの「三聯書店」となりました。また、中華人民共和国初期における出版流通システムの再建において、「新華書店」のようなネットワークの構築にも生活書店の経営ノウハウが用いられたと考えます。一方、生活書店の関係者の数人は新中国成立後、政府の言論や出版機関の要職を務めるなど、1950年代以降の中国の言論政策形成においても大

きな影響をもたらしていました。目下私は、このような経緯をめぐって、これまでの研究成果を踏まえ、「近現代中国におけるジャーナリズムの変容と連続性―民国期から人民共和国初期への移行を中心に」という課題に取り組んでいます。そして将来、この研究課題を、1972年の日中両国政府の共同声明に基づく国交正常化が実現されるまでの、中国国内の世論形成にかかわる諸事象と関連付けたものとして展開していこうと考えています。

日本を含め、中国国外におけるジャーナリズム言説において、中国に対する関心の多くは、やはり中国観察（China watching）、すなわち中国の政治や社会の出来事を注視し解説し、ときには厳しい批判を加える姿勢だと、私には思います。中国国内における報道や世論についても、単に「統制下のもの」として捉えられがちです。しかし、具体的な歴史的事象に基づいた検討を出発点としなければ、いかなる（日本の一部のジャーナリズム言説のような）批判も宙に浮いたものとなり、結局は一時的な出来事を追う形で終わってしまうでしょう。歴史的な視点から俯瞰し、豊富な一次資料をもとにじっくりとした検証を経て、はじめて複雑な事象の本質が見えてくることが多いです。ジャーナリズム史研究の意義はそこにあるのではないかと思います。

「呪術」を通じた人間理解―フィリピン地方都市のフィールドから

東 賢太郎
大学院文学研究科准教授

に、調査地での呪術的な思考や行動は日々継続していました。

それは、未だに科学や医学が発達していないから、教育によって合理的発想が根付いていないからという、彼らの我々からの「遅れ」によるものではありません。たとえば、夜中にお墓を通り抜けることに強烈な恐怖を感じたり、どうしても成就したい学業や安産の願いをお守りに込めたりすることを、呪術的な思考や行動だと呼ぶとしたらどうでしょうか。そうでなくても、各種のジンクスや民間療法、メディアで活躍する占い師、再生産され続ける都市伝説やホラー映画など、科学とも合理ともかけ離れた呪術的想像力によって我々の日常生活は彩られています。そういった「我々の中の呪術」は、「彼らの中の呪術」といかにほど異なるものなのでしょうか。

異なった文化や社会的な背景をもつ異国の地に赴き、自分の慣れ親しんだ世界観を疑い問いなおしながら、あちらとこちらの往復作業の中で人間理解を深めていくこと。僕にとって「呪術」とは、その知的営みを行う上での刺激に満ち溢れた触媒のようなものなのかもしれません。

ここ15年ほど、フィリピンのある地方都市で社会調査を続ける中で、僕がとくに注目しているのは、病いや死、その他諸々の災厄についての呪術的な対処法です。それは、成功を妬んだ他人の呪いや、すみかを荒らされた精霊の怒りなど超自然的な原因によって、人々に各種の不幸が降りかかりうるという因果関係を背景にしています。そういった不幸の原因を取り除くためには、「呪医」とよばれる呪術の専門家による治療やお祓いの儀礼を行う必要があります。人々は科学も医学も対処できない不幸に直面したとき、呪医のもとを訪れ、頼り相談し、その指示に従って行動します。

「病の源」を布ではたき落とす治療術（図1）や、豚や鶏を精霊にささげる儀礼（図2）など、一見してあきらかに非合理的な行いの背景に、自分を呪った他人や怒り狂う精霊についてのリアルな恐怖感があることを知ったとき、僕は人間の精神活動の根幹を垣間みた気がしました。他人が自分について何を思っているのか究極的にはわからないという不安。はたして神や精霊など人以外の超自然的な「何か」が存在するのかしないのかという謎。そういった根源的かつ普遍的な問いを背景



図1 布で「病の源」をはたきおとす呪医



図2 精霊に豚や鶏をささげる供物儀礼

外部評価（社会的評価）委員会を開催

●大学院経済学研究科

大学院経済学研究科は、3月22日(木)、経済学部第1議室において、外部評価（社会的評価）委員会を開催しました。

同研究科外部評価委員会は、平成18年度まで各界の有識者を招き毎年懇談会として多方面からのご意見を伺っていましたが、平成19年度からは、隔年で研究面に関して当該

分野の専門的研究者から評価を受ける外部評価（研究評価）委員会と、主として研究以外の諸側面に関して多様な立場・観点から評価を受ける外部評価（社会的評価）委員会を行うこととしています。この方針に従って、今年度は、特に、同研究科で行われている各プロジェクトを中心に評価を受けるための外部評価（社会的評価）委員会を開催しました。

委員会では、委員長の鈴置工学研究科長と、3名の委員により、社会貢献活動について数々の貴重なご意見をいただき、評価を受けました。



外部評価委員会の様子

地震火山研究センター年次報告会を開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科附属地震火山研究センターは、3月23日(金)、環境総合館レクチャーホールにおいて、地震火山研究センター2011年度年次報告会を開催しました。

同報告会では、「2011年東北地方太平洋沖地震に伴う地殻変動」、「駿河-南海トラフにおける海底地殻変動モニタリング」、「地震計アレイでみた2011年新燃岳噴火活動の推移」、「アクロスの桜島への展開」、「GPS観測網（AGNeSS）によるスマトラ断層の断層固着の空間変化」の5つの研究

テーマに関する成果報告と、教職員、研究員、学生による15件のポスター発表や、木股文昭同センター教授の最終講義が行われ、約80名が参加しました。

特に、木股教授による「2万人の視線を感じながら次の巨大地震に備える」と題した最終講義では、現在の防災体制に関して、2004年スマトラ島沖地震などの過去の事例に基づいた考察がされ、地震国日本で地震津波災害に備えて生き抜いてゆくための力強い提言がありました。



最終講義をする木股教授



報告会の様子

環境医学研究所動物慰霊祭を挙げる

●環境医学研究所

環境医学研究所は、3月30日(金)、同研究所建物外の一画に設けられた慰霊碑において、動物慰霊祭を挙りました。

同研究所は、東山キャンパスで唯一のSPF実験動物飼育施設を有し、動物実験が研究推進の欠かせない方法となっています。

動物実験の実施に当たっては、動物実験委員会における

実験計画内容の厳正な審査を経て、例年80件程度の実験が行われており、本学の研究に多大な成果をもたらしています。

慰霊祭では、日ごろ研究に供された実験動物に感謝するとともに、その霊を慰めるため、慰霊碑に供花・供物を配して、宝珠院僧侶2名による読経が行われる中、参列した教職員、大学院生等60名余りが次々と焼香・合掌しました。



慰霊碑



読経の様子

強結合ゲージ理論におけるコンフォーマル対称性に関する国際会議を開催

●素粒子宇宙起源研究機構

素粒子宇宙起源研究機構(KMI)は、3月18日(日)から20日(火)の3日間、ES総合館において、強結合ゲージ理論におけるコンフォーマル対称性に関する国際会議を開催しました。

「質量の起源」の解明は、素粒子物理学の最も緊急の課題であり、質量の起源とされる未発見粒子「ヒッグス粒子」

の探索を試みる大型ハドロン衝突型加速器(LHC)における実験は、世界中の注目を集めています。この解明が成功すれば、それを突破口として、「坂田模型」を発端とし「クォーク」を経て小林・益川理論で完結した「標準模型」を超える新たな物理革命を迎えると期待されています。

KMIは、「革命を再び名古屋から」を目指し、その発足以来ヒッグス粒子を強結合ゲージ理論による複合粒子とみるアプローチを主要プロジェクトとして推進してきました。これは、南部陽一郎シカゴ大学名誉教授がノーベル賞受賞論文で当時素粒子とされていた陽子の質量の起源を説明するために導入したもののゲージ理論による現代版であり、益川同機構長らの力学的研究に基づき山協同機構特任教授らが提唱した「ウォーキングテクニカラー模型」として発展しているものです。KMIではLHC実験での検証を目指す現象論的研究と平行して、この模型の特徴であるコンフォーマル対称性を持つ力学的理論的検証のため、専用計算機による格子ゲージ理論の数値実験を行っています。

同会議には、ジョン・エリス氏をはじめとする海外の著名な物理学者ら20名を含む50名が参加し、非常に密度の高い討論が行われました。



集合写真

第23回博物館企画展「吉崎 誠海藻コレクション」を開催

●博物館

博物館は、3月10日(土)から4月14日(土)までの間、中日新聞社との共催で、第23回博物館企画展「吉崎 誠海藻コレクション-震災と標本レスキュー-」を開催しました。これは、東邦大学習志野メディアセンター、大学博物館等協議会の協力を得て行った企画で、期間中の入場者は2,500名を数えました。

企画展のタイトルにもなっている故 吉崎 誠氏は藻類の分類学者であり、生涯をかけて国内外8万点を超える藻類の標本を収集しました。その内の181点は教育標本として平成17年3月に本学博物館に寄贈されています。吉崎氏は、この国内2番目の数を誇り、個人で集めた数としては世界一とも言われるコレクションの受け入れ先と研究拠点として、海藻の主な採集地の1つである岩手県山田町の「鯨と海の博物館」を選び、平成23年3月7日にコレクションを運び終えて自宅に戻りました。しかし、4日後の3月11日に東日本大震災による津波が襲い、寄贈した8万点の標本や顕微鏡類、文献類が流出しました。その後、山田町職員や岩手県立博物館職員等により1万1千点余りが救出されました。



関連イベント「海藻標本を作ってみよう！」の様子



講演する岡村センター長

今回の企画展は、吉崎氏が分類学者として描いた芸術の域に達する藻類の顕微鏡スケッチと、本学博物館に寄贈された標本とを中心に展示し、来館者が、標本の持つ価値と、写真ではなく標本をスケッチする重要性を改めて考える契機となるようにしました。海藻標本の救出活動や救出された標本、さらに本学博物館スタッフが参加した陸前高田市立博物館の標本供出活動についても併せて紹介しました。

また、会期中2回にわたり関連する特別講演を開催しました。

3月11日(日)には、北山太樹国立科学博物館研究主幹による講演会「津波に襲われた海藻標本のレスキュー活動」を行いました。北山研究主幹は、吉崎氏の研究仲間であり、津波によって流失した吉崎氏の8万点を超える海藻標本の救出活動にもあたりました。講演では、海藻の分類の基礎から始まり、吉崎氏のコレクションの価値や標本の大切さ、実際に行った標本救出活動まで、津波でさらわれて泥まみれになった標本などの実物も交えて話がありました。

3月15日(木)には、岡村行信産業技術総合研究所活断層・地震研究センター長による講演会「東北地方太平洋沖地震から学ぶ過去の警告」を行いました。岡村センター長は、平安時代に起こった東北地方の津波を砂の堆積物から知ることに始まり、東日本大震災の地震と津波のメカニズムや東海地方に起きた過去の津波の痕跡などを、一般の方にもわかりやすく話しました。

さらに、3月31日(土)には、関連イベント「海藻標本を作ってみよう！」を開催し、子どもからシルバー世代まで36名の参加者がありました。吉崎氏の教え子である藤田隆夫日本大学習志野高等学校教諭を講師として迎え、新潟大学佐渡臨海実験所から届いた海藻で、きれいな紅藻、緑藻、褐藻標本を作製しました。

ミクロの探検隊を開催

●博物館

博物館は、4月14日(土)、ミクロの探検隊「草はらのムシを電子顕微鏡で見よう」を開催しました。

ミクロの探検隊は、博物館が平成19年から行っている電子顕微鏡を利用した体験型次世代教育で、今年は、野外での採集と実験室での観察の両方を体験する企画を行い、小・中・高校生など、抽選で選ばれた16名が参加しました。



電子顕微鏡を操作する参加者

まず、学内の草はらで、ピーティングネットを使用して、クモやゾウムシなどの小さな春のムシを集めました。雨上がりで、ムシは少なかったものの、各自、数匹は採集することができました。最初は、なかなかピーティングネットにムシが入らなかった小学生も徐々に腕を上げていました。

次に、同館実験室において、実体顕微鏡を使用し、採集したばかりのムシを観察し、ムシの名前を調べたり、写真を撮ったりしました。

さらに、詳細に観察するため、電子顕微鏡での観察及び撮影を行いました。初めて触れる電子顕微鏡とそこに映し出される今まで見たことのないミクロの世界に、参加者は興奮気味の様子でした。

最後には、撮影した写真を使ったポストカードを作成し、参加者にとって良い記念となったようです。

グリーンベルトを花いっぱい計画



色とりどりのチューリップ

名古屋大学では、大学と学生が一緒になって環境活動を実施する「花いっぱい運動」を展開しており、東山キャンパスのグリーンベルトの東側では、豊田講堂前の芝生広場の両サイドにプランターを並べ、四季折々の花が咲くように、学生が年間を通じて維持管理をしています。

今回は「グリーンベルトを花いっぱい計画」と銘打って、チューリップ1万1千4百株、ムスカリ1万株、ハーブ類6百株を、寒風吹きすさぶ昨年12月に約2週間をかけて、毎日4、5人の学生が、施設管理部職員の指導のもと、授業の合間を縫って交替で植え付けを行いました。その結果、春の日差しが眩しい4月から5月にわたり、西側のグリーンベルト内に色とりどりのチューリップと青紫のムスカリが咲き誇り、学生や教職員だけでなく通行人や地域住

民の皆さんにも楽しんでいただけました。

なお、この活動に協力しているのは、学生団体である名古屋大学環境サークル「Song Of Earth」で、このサークルは、毎年春に「下宿用品リユース市」の開催や毎月1回学内のゴミ拾い活動を行う「ゴミ拾いでエコ〜よ」も実施しており、本学では、このような学生を主体とした運動が、学生への環境配慮への意識付けや啓発に大いに役立つと評価しています。

今後も、真冬を除き四季を通じて花が楽しめるように考えており、学生たちと相談した結果、今年度は、夏は背丈の低い「ひまわり」、秋は「コスモス」、初春は「菜の花」などの植え付けを計画しています。



植え付けの様子



記念撮影



名古屋大学は名古屋からエコ事業所の認定を受けています



未来が変わる。日本が変わる。
名古屋大学はチャレンジ25に参加しています。



半年早く退職して

清水 純夫 大学院文学研究科教授

64歳まで定年が延長されましたが、かねてから63歳での退職を固く決意しておりましたので、やむをえない事情で半年延ばしはしましたが、昨年9月末で一足早く退職いたしました。名古屋大学の学部、大学院の学生として8年間在学した後、助手として3年間在職し、その後他大学での教官生活を経て、1989年10月、奇しくも東西ドイツ統一の年に再び名古屋大学文学部の独文学講座に着任、昨年9月末の退職まで22年間勤務、という具合に、名古屋大学には本当に長い間お世話になりました。

文学研究の地盤沈下が著しい昨今ですが、私の研究テーマは従来のリアリズム論と作品内在的解釈を融合させた独自のリアリズム論構築の模索、またロマン主義的・非合理主義的衝動やテロリズムへの衝動の克服などです。これらの理論を応用してゲーテやシラーの古典主義の再評価やドイツ短編小説の作品分析などを行い、その成果を文学部のみならず開放科目として全学の学生にも紹介してきましたが、蒔いた種からいつ

か芽が出ることを願っています。

退職後は故郷に戻り、いっさいの束縛から解放された自由な日々を満喫しています。

名古屋大学のますますの発展を祈念致します。



お世話になりました

本間 靖規 大学院法学研究科教授

2000年4月から2012年3月まで、名古屋大学に奉職させていただきました。赴任当時は、法科大学院の立ち上げでどの大学も構想を練っていたのですが、名古屋大学も私が来て早々に浜田道代先生を中心にして法科大学院プランを発表したところでした。そのときは、まさか4年後に私が初代の法科大学院長になるとは思いもよらないことでした。そのようなわけで2004年から2006年までは、私にとりましてまさに激動の時代でした。法科大学院の初動体勢作りや毎年数が増えていく院生たちの要求にできる限り応えながらも、講義の準備におわれる日々を過ごしたことは、今思えばよくあれだけの仕事をこなせたと思うような忙しさでした。

2006年に法科大学院長の職を終えると同時に、今度は、総長補佐として、おもに法務室を担当いたしました。多くの皆様に支えられながら、大学で起こる出来事に対応し、解決案を練る、あるいはこれから起こるであろうリスクを回避することを考えるという部署で

の仕事は、大学全体の成り立ちや問題点を認識するのに役立ち、また大学運営の牛耳を執っている方々と接しながらの毎日でした。これらは大変有意義であったと思っております。それにしても大学がいかに多くの課題を抱えているかを思い知らされました。もしこの仕事に就かなかつたら、法学研究科のみの狭い世界で終わっていたことと思います。その意味でこの12年間のすべてが私にとりまして大学人としての自覚を高めるのに役立ったことに今は感謝しております。



28年半の思い出

奥村 隆平 大学院経済学研究科教授

私は、1983年10月に弘前大学から名古屋大学に赴任しました。その後、本年3月に退職するまで28年半という永きにわたり、名古屋大学にはお世話になりました。

教育面では、主に国際経済学の講義を行い、また、約250名の演習生を指導しました。大学院では、10名が博士の学位を取得しました。

研究面では、貨幣的一般均衡理論を出発点として、その枠組みを国際マクロ経済学へ適用することによって、マンデル＝フレミング・モデルに代表される国際マクロモデルを見通しの良いものにすることができました。その後、変動相場制の具体的事実が積み上げられる過程で、為替レート決定のアセット・アプローチが盛んになってきたことがあり、私もその方面の研究をまとめ学位論文を書き上げました。

また、動学的最適化の手法を枯渇性資源の問題に適用し、ハートウィック・ルールにミクロ的基礎を与えることに成功しました。

学内行政の面では、総長補佐として、松尾稔総長の下で大学の独立行政法人化移行へのお手伝いや、高等研究院副院長として、北住炯一院長の下でテニユア・トラック導入の企画・立案にあたったことなどがよい思い出です。

本年4月からは金城学院大学へ舞台を変え、新しい思い出をつくることになりました。



医療安全と professionalism

上田 裕一 大学院医学系研究科教授

1999年、私は47歳で医学部胸部外科学教授に着任しましたが、神戸大学を卒業後、全く大学に在籍歴のない私を選考されたことには、驚きました。当時は戸惑うことばかりで、各所にご迷惑をお掛けしましたが、壁にぶつかるたびに「私を教授に選考された理由は何か？」と自問し、大学病院の診療体制の改革の必要性を訴えてきたつもりです。法人化と相まって、教員と手術件数は増加して、少しは貢献できたと考えていますが、医学部・名大病院の多くの方々のご支援、ご協力によるものと感謝しております。

2002年からは、外科の専門領域を越えて医療安全活動が仕事の中で大きなウエイトを占めました。特に2007年まで名大病院の医療安全管理部長を拝命し、院内に留まらず、社会活動の機会を得ました。この経験から大学での外科医の skill 教育と professionalism の涵養の重要性を痛感した次第です。外科医に対する大学院での教育・研究・臨床のバランスが問われていると思います。名古屋大学がこの面でも益々の発展さ

れますことを祈念しております。

さて、私は60歳を契機に名古屋大学を退職して、2012年から古巣の公益財団法人 天理よろづ相談所病院の院長・医学研究所長として勤務しております。当地は奈良の南、「山辺の道」の直ぐ近くですので、機会がございましたら、是非お立ちよりください。



今様林住期へ向けての助走

西山 幸廣 大学院医学系研究科教授

学生、院生として10年間、教職員として34年間の長きにわたり名古屋大学にお世話になった。入学当時と比べると建築物の充実は著しく、鶴舞キャンパスではほとんどが新しい建物に置き換わり様変わりした。延床面積では2倍をゆうに超えたのではなかろうか。それだけ成長と変化が速かった訳で喜ばしいことではあるが、名古屋大学が伝統と革新性を併せもつ University となるには今しばらく時間を必要とするのだろう。今後を楽しみに見守りたい。

私は研究生生活の大半をヘルペスウイルス群、とくにプロトタイプとなる単純ヘルペスウイルスの増殖機構、病原発現機構の解明に取り組んできた。その過程で未知のウイルス遺伝子に数多く出会い、いくつかの機能と役割を明らかにした。それが多少の自慢ではあるが、テーマ自体はそのまま残ったようなもので、最も単純な“生命体”とはいえ研究は果てしなき探究であると知った。応用研究では優れた抗がん作用をもつユニークな oncolytic virus を開発した。現在、国内

外で治験が進行中であり、臨床応用にむすびつく良い結果を期待したい。こうした成果の多くは院生らの協力によるもので、優秀な人材をひきつけてくれた看板のありがたさを実感している。退任後もしばらくはウイルスとの縁は切れそうもないが、これからはヒトと直接関わる領域で仕事をしたいと考えている。40年間の大学生生活を終えた学生気分にて、新しい分野にチャレンジしているところです。



退職にあたって

金田 行雄 大学院工学研究科教授

昭和51年以来35年余り務めた名古屋大学を定年まで1年を残し本年3月に退職致しました。赴任当初は工学部の工業数学講座・応用物理学教室に所属し、その後多元数理科学研究科創設時にその新研究科に籍を移し、さらに2年後工学研究科計算理工学専攻発足時に再び工学研究科に戻りました。この間、素晴らしい先輩、同僚をはじめ多くの方々にお世話になりました。心より感謝致します。

研究面では主として流体力学、とくに乱流の理論的研究を行ってきました。初めの頃はそれこそ紙と鉛筆による研究でしたが、徐々にコンピュータを用いる研究の側面が増えてきました。時代とともに研究環境や設備が良くなってきた一方で、工業数学時代のいわば牧歌的時代に比べ時間的余裕が減ってきた印象があります。その減少とともに、学生の皆さんと接する時間も減ってきたのではないかと反省しています。

昨今、大学における教育・研究の評価が求められる機会が増えてきました。しかしながら、その教育・研

究の成果はすぐに目に見え評価できるものだけではありません。名古屋大学学術憲章に謳う「勇気ある知識人」に必要な資質の一つは外なる権威に頼らない、しかも独りよがりではない、自律的評価・判断ができることにあると思います。名古屋大学において「自由闊達な学風の下」、短期的のみならず長期的視点にも立ち、勇気を持って教育・研究がますます推進されることを願っています。



新たな旅立ちのために

西原 和久 大学院環境学研究科教授

1990年代末に着任の私が定年前退職を決意したのは、自分の研究集成に今後10年かけたい思いからだ。着任後、文学研究科から環境学研究科に所属変更となったが、環境問題は社会の問題＝人間の問題を抜きに語れないという信念は変わらない。

昨今、基礎研究の重要性が語られるが、人文社会系でもそれは極めて重要だ。いや、人文社会系こそ、その重要性が語られるべきだ。なぜなら、科学という営み自身も人間行為だからである。行為論に基づく社会学基礎論研究をテーマとする私は、科学を含む人間行為の基礎論がどの学問にも通底する要諦だと考えてきた。むろん学問は単独で為しえるものではない。過去からの蓄積と現在の研究者間の協働が問われる。特に、流動する社会を扱う社会学は、理論的・実証的検討に加え、社会への実践的関与も伴う。ここ10年、アジアの社会学研究者の連携に努めたのも、この視点からだ。その活動の場として名大は絶好の舞台だった。世界に開かれた名古屋大学。その利点に基礎研究重視

の環境が整えば、名大の将来は明るい。

環境学研究科で私は人間・社会環境学の構築に努めてきたつもりだが、その点では道半ばである。若い世代がこの構築に果敢に挑戦することを願っている。私自身は、次の10年間、新たな大学で自分なりの夢の実現に努めたい。名誉教授資格はその実現を後押する新たな旅立ちの伴侶だと考えている。感謝をこめつつ、名古屋大学の発展を祈る。



教育を学んだ9年間

石井 健一郎 大学院情報科学研究科教授

企業の研究所に29年間勤めた後、平成15年4月、情報科学研究科の発足と同時に名古屋大学に勤務し、この3月で退職しました。研究については企業でも取り組んできましたが、教育について全く経験が無く、手探りの9年間でした。私の専門はパターン認識で、企業で30年近く従事してきた分野です。しかし、いざ講義の準備にとりかかってみると、これまでの自分の理解がいかに不十分であったかということを知らされることになりました。シラバスを作成し、講義のシナリオを考え、アンケートにより講義の改善を図り、試験によって学生の理解度を確認するというサイクルは骨の折れる作業でした。しかし、これらは私にとって新鮮かつエキサイティングな活動でもありました。毎年改善を続けましたが、なかなか満足のできる講義に到達することができないまま、退職を迎えてしまいました。教育の難しさ、奥深さを今更ながら感じている次第です。

一方、研究では、コミュニケーションをテーマとし

て採りあげ、対話エージェントの設計や、マルチエージェントシステムに取り組んできました。幸い研究室メンバーのたゆめぬ努力の甲斐あって、満足のできる研究成果が得られたと自負しています。

このような充実した教育・研究活動に携わることができましたのも、優秀な先輩諸氏、優秀な学生に恵まれたためだと深く感謝しております。名古屋大学の益々のご発展をお祈りいたします。



学生相談の展開とともに

鶴田 和美 発達心理精神科学教育研究センター教授

私は、1985年に名古屋大学助手に着任し、講師、助教授を経て、2001年に発達心理精神科学教育研究センターおよび学生相談総合センター教授に就任し、この3月に名古屋大学を退職いたしました。

専門は臨床心理学であり、大学生を対象とした学生相談に従事してきました。私が着任した当時の学生相談室は、本部の一隅に2室というスペースでした。その後しだいに、全学の共通基盤としての意義が認められ、2001年4月に、3部門からなる学相センターが設立され、本学の相談体制が大きく拡充しました。その後、同センターは、さらに拡充して今日に至っています。このような学生相談体制の展開とともに歩めたことは、私にとって幸運なことでした。

私の研究は、発達支援的視点から、「卒業期」の学生の心理的特徴を示すことから始まり、その後しだいに、入学から卒業までの各時期の学生の心理的特徴を示す「学生生活サイクル」を示すことをめざしました。実践から得られた学生支援の知見を、言葉にすること

に苦心してきました。

多くの教職員の方々に御礼申し上げ、名古屋大学の益々のご発展を祈念いたします。

名大を表敬訪問された方々 [平成24年1月16日～4月15日]

日付	国/地域	訪問者	目的
2月29日	ウズベキスタン	タシケント国立法科大学よりミルザユスーブ・ルスタムバーエフ学長	大学間協定更新のための調印式
3月6日	インドネシア	インドネシア・ムスリム大学よりアブドゥル・マクスド副学長、ハサスディン大学よりディラヤ・ラウフ・フセイン数学・自然科学部副学部長ほか2名	学術交流に関する意見交換
3月9日	カナダ	在名古屋カナダ領事館よりマット・フレイザー領事兼通商代表ほか1名	カナダと本学との学術交流及び教育プログラムの推進に関する意見交換
3月14日	アメリカ	バード・ハイスクール・アーリーカレッジより高校生9名及び教員2名	本学教育学部附属高等学校との交流プログラムの一環
3月15日	ベトナム	ベトナム国家大学ハノイ 経済ビジネス大学よりグエン・ホン・ソン学長ほか1名	学術交流に関する意見交換
3月15日	中国	天津城市建设学院より李忠献学長ほか2名	表敬あいさつ及び施設見学
3月16日	ノルウェー	駐日ノルウェー王国大使館よりアルネ・ウォルター大使ほか2名	学術交流に関する意見交換
3月23日	韓国	駐名古屋韓国総領事館より李均東総領事ほか2名	韓国語・外国語図書の寄贈式
3月29日	サウジアラビア	サウジアラビア王国大使館イサム・ブカーリ文化アタッシュェほか1名	表敬あいさつ及びサウジアラビアの大学との協力関係構築に関する意見交換
4月2日	カナダ	モントリオール大学よりグエモン・ゴティエ・ルーイズ国際関係アドバイザー	大学間協定及び交流に関する意見交換
4月10日	アメリカ	リンドバーグ高校より教員等5名及び高校生10名	本学施設見学及び教育学部附属高等学校での見学・交流

新たに締結した学術交流協定 [平成24年1月16日～4月15日]

大学間学術交流協定

締結日	地域/国名	大学/研究機関名
1月6日	ベトナム	ベトナム国家大学ハノイ
2月20日	カナダ	モントリオール大学
3月6日	フランス	リヨン高等師範学校

部局間学術交流協定

締結日	地域/国名	大学/研究機関名	部局名
12月30日	台湾	台湾海洋研究所	地球水循環研究センター
4月2日	韓国	地質資源研究院地質・環境災害部門	博物館

構成員を対象とした研修 [平成24年1月16日～4月15日]

実施日	研修名	目的	参加人数
1月26日	第6回特許中級セミナー	2011年秋に成立した改正米国特許法につき、大学研究者の目線で重要と思われるポイントを深掘りしつつ解説。米国の大学での知財活動状況についても、裁判例、成功例という切り口で紹介。	23名
2月8日	第69回特許基礎セミナー	特許出願が未経験で、今後出願したい、特許出願に興味を持っている、あるいは出願経験はあるが再確認をしたい教職員、研究者、大学院生等を対象として研究成果を特許出願するための知識習得を目的とする。	11名
3月9日	教員向けハラスメント防止研修会	教員を対象に、ハラスメントの定義等を確認し、加害者、被害者にならないようにすることを目的とする。	26名
4月2日	診療報酬説明会（看護部向け）	保険医療機関（臨床研修病院）として、保険診療に関するルールの周知徹底及び知識向上を目的とする。	139名
4月3日	診療報酬説明会（研修医向け）	保険医療機関（臨床研修病院）として、保険診療に関するルールの周知徹底及び知識向上を目的とする。	27名
4月4日	診療報酬説明会（医師向け）	保険医療機関（臨床研修病院）として、保険診療に関するルールの周知徹底及び知識向上を目的とする。	71名

新任部局長等の紹介

●大学院文学研究科長・文学部長

木俣 元一
(きまた もとかず)



専門分野：美学・美術史
(略歴)

昭和62年5月 名古屋大学文学部助手
平成3年10月 名古屋大学文学部助教授
平成12年4月 名古屋大学大学院文学研究科助教授
平成15年5月 名古屋大学大学院文学研究科教授
平成18年4月 名古屋大学総長補佐(教育・研究推進担当)
平成19年4月 名古屋大学大学院文学研究科副研究科長
平成21年1月 名古屋大学高等教育研究センター長
平成21年4月 名古屋大学総長補佐(評価担当)
平成24年4月 名古屋大学大学院文学研究科長・文学部長

●大学院法学研究科長・法学部長

定形 衛
(さだかた まもる)



専門分野：国際政治学
(略歴)

昭和60年4月 大分大学経済学部助教授
平成2年4月 金沢大学法学部助教授
平成7年4月 金沢大学法学部教授
平成10年4月 名古屋大学法学部教授
平成11年4月 名古屋大学大学院法学研究科教授
平成16年4月 名古屋大学大学院法学研究科副研究科長
平成17年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成24年4月 名古屋大学大学院法学研究科長・法学部長

●大学院経済学研究科長・経済学部長

木村 彰吾
(きむら しょうご)



専門分野：会計学
(略歴)

平成2年4月 名古屋大学経済学部助手
平成5年4月 学校法人椋山女学園専任講師
平成9年4月 学校法人椋山女学園専任助教授
平成11年4月 名古屋大学経済学部助教授
平成12年4月 名古屋大学大学院経済学研究科助教授
平成16年4月 名古屋大学大学院経済学研究科教授
平成18年4月 名古屋大学総長補佐(財務担当)
平成20年8月 名古屋大学大学院経済学研究科副研究科長
平成22年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成24年4月 名古屋大学大学院経済学研究科長・経済学部長

●大学院理学研究科長・理学部長

篠原 久典
(しのはら ひさのり)



専門分野：ナノ物質科学
(略歴)

昭和54年10月 分子科学研究所助手
昭和56年4月 岡崎国立共同研究機構分子科学研究所助手
昭和63年9月 三重大学工学部助教授
平成5年4月 名古屋大学理学部教授
平成8年4月 名古屋大学大学院理学研究科教授
平成10年4月 名古屋大学物質科学国際研究センター教授
平成11年4月 名古屋大学大学院理学研究科教授
平成21年4月 名古屋大学大学院理学研究科副研究科長
平成24年4月 名古屋大学大学院理学研究科長・理学部長

●大学院医学系研究科長・医学部長

高橋 雅英
(たかはし まさひで)



専門分野：実験病理学、細胞生物学、分子生物学
(略歴)

昭和60年11月 愛知県がんセンター研究所研究員
平成1年4月 愛知県がんセンター研究所主任研究員
平成2年4月 名古屋大学医学部助手
平成3年1月 名古屋大学医学部講師
平成7年6月 名古屋大学医学部助教授
平成8年7月 名古屋大学医学部教授
平成12年4月 名古屋大学大学院医学研究科教授
平成15年4月 名古屋大学大学院医学系研究科附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター長
平成15年4月 名古屋大学評議員
平成16年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成17年4月 名古屋大学大学院医学系研究科副研究科長
平成20年3月 名古屋大学大学院医学系研究科附属医学教育研究支援センター長
平成24年4月 名古屋大学大学院医学系研究科長・医学部長
平成24年4月 名古屋大学脳とこころの研究センター副センター長

●大学院生命農学研究科長・農学部長

前島 正義
(まえしま まさよし)



専門分野：生物化学、分子生物学
(略歴)

昭和59年12月 名古屋大学農学部助手
昭和63年4月 北海道大学低温科学研究所助手
平成2年4月 北海道大学低温科学研究所助教授
平成6年4月 名古屋大学農学部助教授
平成11年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科助教授
平成13年7月 名古屋大学大学院生命農学研究科教授
平成23年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科副研究科長
平成23年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成24年4月 名古屋大学大学院生命農学研究科長・農学部長

新任部局長等の紹介

●大学院国際開発研究科長

藤川 清史
(ふじかわ きよし)



専門分野：経済統計学、経済政策
(略歴)

昭和61年4月 摂南大学経営情報学部講師
平成1年4月 国際連合経済社会局統計官
平成3年4月 大阪経済大学経済学部助教授
平成9年4月 甲南大学経済学部教授
平成19年4月 名古屋大学大学院国際開発研究科教授
平成20年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成20年4月 名古屋大学大学院国際開発研究科副研究科長
平成24年4月 名古屋大学大学院国際開発研究科長

●大学院創薬科学研究科長

松下 裕秀
(まつした ゆうしゅう)



専門分野：高分子物理化学
(略歴)

昭和57年4月 名古屋大学工学部助手
昭和62年8月 名古屋大学工学部講師
平成6年1月 名古屋大学工学部助教授
平成6年7月 東京大学物性研究所附属中性子散乱研究施設助教授
平成11年4月 名古屋大学大学院工学研究科教授
平成16年4月 名古屋大学総長補佐(目標・評価担当)
平成16年5月 名古屋大学評価情報分析室長
平成16年10月 名古屋大学評価企画室長
平成19年4月 名古屋大学副総長
平成19年4月 名古屋大学総合企画室長
平成21年4月 名古屋大学経営協議会委員
平成24年4月 名古屋大学大学院創薬科学研究科長

●環境医学研究所長

澤田 誠
(さわだ まこと)



専門分野：神経化学、神経薬理学
(略歴)

昭和61年4月 藤田保健衛生大学総合医科学研究所助手
昭和64年1月 米国国立衛生研究所ポストドクトラルフェロー
平成5年1月 藤田保健衛生大学総合医科学研究所講師
平成8年1月 藤田保健衛生大学総合医科学研究所助教授
平成12年4月 藤田保健衛生大学総合医科学研究所教授
平成17年1月 名古屋大学環境医学研究所教授
平成20年4月 名古屋大学環境医学研究所副所長
平成22年4月 名古屋大学環境医学研究所附属近未来環境シミュレーションセンター長
平成24年4月 名古屋大学環境医学研究所長

●エコトピア科学研究所長

田中 信夫
(たなか のぶお)



専門分野：環境・エネルギー材料物理学、
電子顕微鏡学

(略歴)
昭和54年5月 名古屋大学工学部助手
平成2年7月 名古屋大学工学部助教授
平成9年4月 名古屋大学大学院工学研究科助教授
平成11年4月 名古屋大学大学院工学研究科教授
平成14年4月 名古屋大学理工科学総合研究センター教授
平成16年4月 名古屋大学エコトピア科学研究機構教授
平成17年4月 名古屋大学エコトピア科学研究所教授
平成24年4月 名古屋大学エコトピア科学研究所長

●附属図書館長

佐野 充
(さの みつる)



専門分野：環境情報学
(略歴)

昭和56年4月 名古屋大学教養部助手
昭和60年4月 名古屋大学教養部講師
昭和63年2月 名古屋大学教養部助教授
平成5年10月 名古屋大学情報文化学部助教授
平成7年4月 名古屋大学情報文化学部教授
平成13年4月 名古屋大学大学院環境学研究科教授
平成13年4月 名古屋大学評議員
平成17年4月 名古屋大学情報文化部長
平成20年4月 名古屋大学教養教育院副院長
平成20年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成24年4月 名古屋大学附属図書館長

●情報基盤センター長

伊藤 義人
(いとう よしと)



専門分野：構造工学、地震工学、維持管理工学
(略歴)

昭和52年4月 名古屋大学工学部助手
昭和63年10月 名古屋大学工学部助教授
平成7年4月 名古屋大学理工科学総合研究センター教授
平成12年4月 名古屋大学附属図書館長
平成12年4月 名古屋大学評議員
平成15年4月 名古屋大学大学院工学研究科教授
平成16年4月 名古屋大学経営協議会委員
平成16年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成16年4月 名古屋大学総長選考会議委員
平成21年4月 名古屋大学情報連携統括本部副本部長
平成21年4月 名古屋大学情報連携統括本部情報戦略室長
平成24年4月 名古屋大学情報基盤センター長

新任部局長等の紹介

●高等教育研究センター長

早川 義一

(はやかわ よしかず)

専門分野：制御工学

〈略歴〉

昭和54年4月 名古屋大学工学部附属自動制御研究施設助手
昭和60年4月 名古屋大学工学部助手
昭和61年8月 名古屋大学工学部講師
平成2年4月 名古屋大学工学部助教授
平成8年4月 名古屋大学工学部教授
平成9年4月 名古屋大学大学院工学研究科教授
平成17年4月 名古屋大学大学院工学研究科副研究科長
平成18年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成24年4月 名古屋大学高等教育研究センター長



●シンクロトン光研究センター長

馬場 嘉信

(ばば よしのぶ)

専門分野：マイクロ・ナノデバイス、
ナノ材料・ナノバイオサイエンス

〈略歴〉

昭和61年6月 大分大学教育学部助手
昭和63年4月 大分大学教育学部講師
平成2年4月 神戸女子薬科大学講師
平成8年4月 神戸薬科大学助教授
平成9年4月 徳島大学薬学部教授
平成16年4月 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部教授
平成16年10月 名古屋大学大学院工学研究科教授
平成20年4月 名古屋大学総長補佐(研究推進担当)
平成20年4月 名古屋大学研究推進室長
平成22年4月 名古屋大学総長補佐(産学官連携・研究推進担当)
平成22年4月 名古屋大学予防早期医療創成センター教授
平成22年12月 名古屋大学革新ナノバイオデバイス研究センター長
平成23年8月 名古屋大学シンクロトン光研究センター副センター長
平成24年4月 名古屋大学シンクロトン光研究センター長



●基礎理論研究センター長

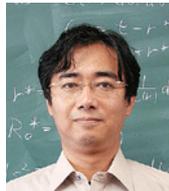
野尻 伸一

(のじり しんいち)

専門分野：素粒子宇宙物理学

〈略歴〉

昭和61年4月 京都大学基礎物理学研究所非常勤講師
昭和62年4月 学術振興会特別研究員
平成1年4月 高エネルギー物理学研究所非常勤講師
平成3年4月 お茶の水女子大学非常勤講師
平成3年11月 東京大学原子核研究所教務補佐員
平成4年4月 防衛大学校助手
平成7年4月 防衛大学校講師
平成9年4月 防衛大学校助教授
平成18年4月 名古屋大学理学部・大学院理学研究科教授
平成24年4月 名古屋大学基礎理論研究センター長



●グリーンモビリティ連携研究センター長

小野木 克明

(おのぎ かつあき)

専門分野：プロセスシステム工学

〈略歴〉

昭和53年4月 名古屋大学工学部助手
昭和55年10月 豊橋技術科学大学工学部助手
昭和57年4月 豊橋技術科学大学工学部講師
昭和63年1月 豊橋技術科学大学工学部助教授
平成6年10月 豊橋技術科学大学工学部教授
平成8年4月 名古屋大学工学部教授
平成9年4月 名古屋大学大学院工学研究科教授
平成16年4月 名古屋大学大学院工学研究科副研究科長
平成17年4月 名古屋大学教育研究評議会評議員
平成19年4月 名古屋大学工学部長・大学院工学研究科長
平成24年4月 グリーンモビリティ連携研究センター長
平成24年4月 名古屋大学教養教育院副院長



●細胞生理学研究センター長

藤吉 好則

(ふじよし よしのり)

専門分野：構造生理学

〈略歴〉

昭和55年4月 京都大学化学研究所教務職員
昭和60年1月 京都大学化学研究所助手
昭和62年2月 蛋白質工学研究所主任研究員
昭和63年4月 蛋白質工学研究所首席研究員
平成6年11月 松下電器・国際研究所リサーチディレクター
平成8年7月 京都大学大学院理学研究科教授
平成24年4月 名古屋大学細胞生理学研究センター教授
平成24年4月 名古屋大学細胞生理学研究センター長



●財務部長

前田 広

(まえだ ひろし)

〈略歴〉

昭和51年5月 佐世保高等専門学校会計課用度係
昭和53年6月 文部省大臣官房会計課用度班
昭和59年7月 文部省大臣官房政策課
昭和62年10月 文部省大臣官房会計課管財班
昭和64年1月 文部省大臣官房会計課管財班主任
平成4年4月 文部省大臣官房会計課経理班主任
平成5年4月 文部省大臣官房会計課経理班係長
平成8年4月 東京学芸大学経理部経理課長
平成10年4月 九州工業大会計課長
平成12年4月 国立学校財務センター管理部企画課長
平成13年11月 文部科学省大臣官房総務課情報開示官
平成15年4月 文部科学省大臣官房総務課課長補佐
平成16年9月 文部科学省大臣官房会計課国有財産調査官
平成17年4月 文部科学省大臣官房会計課経理班主査
平成18年1月 信州大学財務部長
平成20年4月 筑波大学財務部長
平成24年4月 名古屋大学財務部長



新任部局長等の紹介

●施設管理部長

西尾 和幸
(にしお かずゆき)

〈略歴〉

昭和47年3月 京都大学化学研究所
昭和48年6月 京都大学施設部建築課
昭和63年4月 京都大学施設部建築課営繕掛長
平成2年1月 京都大学医学部附属病院管理課施設掛長
平成4年4月 京都大学施設部建築課第二工営掛長
平成5年4月 京都大学施設部建築課工事計画掛長
平成10年1月 神戸大学施設部建築課課長補佐
平成12年4月 京都大学施設部建築課課長補佐
平成14年8月 富山大学施設課長
平成16年4月 富山大学経営企画部施設企画課長
平成17年4月 京都大学施設・環境部施設企画課長
平成20年4月 三重大学施設部長
平成22年4月 神戸大学施設部長
平成24年4月 神戸大学施設管理部長



●医学部・大学院医学系研究科事務部長

塩崎 英司
(しおざき えいじ)

〈略歴〉

昭和59年4月 香川医科大学総務部会計課用度第二係
平成6年4月 香川医科大学総務部会計課総務係総務主任
平成6年7月 香川医科大学総務部会計課用度第二係主任
平成8年4月 香川医科大学業務部医事課専門職員
平成10年4月 香川医科大学総務部会計課用度第二係長
平成13年4月 香川医科大学総務部会計課用度第一係長
平成13年8月 香川医科大学総務部会計課司計係長
平成15年10月 大島商船高等専門学校会計課長
平成17年10月 東京大学医学部附属病院経営戦略課長
平成22年4月 千葉大学医学部附属病院総務課長
平成24年4月 名古屋大学医学部・大学院医学系研究科事務部長



●工学部・大学院工学研究科事務部長

小林 照夫
(こばやし てるお)

〈略歴〉

昭和48年4月 名古屋大学教育学部
昭和54年5月 名古屋大学農学部
昭和57年5月 名古屋大学工学部総務課
昭和62年5月 名古屋大学庶務部国際主幹付
昭和63年4月 名古屋大学庶務部人事課
平成3年5月 名古屋大学庶務部人事課職員掛主任
平成5年5月 名古屋大学庶務部人事課第一任用掛主任
平成6年7月 名古屋大学庶務部庶務課法規企画掛主任
平成6年12月 浜松医科大学総務部庶務課給与係長
平成9年4月 名古屋大学総務部人事課第二給与掛長
平成11年4月 名古屋大学総務部人事課第一給与掛長
平成13年4月 名古屋大学総務部総務課秘書掛長
平成15年4月 名古屋工業大学学生部入試課長
平成19年4月 金沢大学学生部入試課長
平成21年7月 浜松医科大学人事課長
平成24年4月 名古屋大学工学部・大学院工学研究科事務部長



役員等

総長	濱口 道成
理事（総務・入試関係担当）・副総長	杉山 寛行
理事（教育・情報関係担当）・副総長	山本 一良
理事（施設設備・環境安全・男女共同参画関係担当）・副総長	藤井 良一
理事（人事労務・法務・リスク管理・人権関係担当）・副総長	鮎京 正訓
理事（国際・広報・社会連携関係担当）・副総長	渡辺 芳人
理事（財務・事務総括関係担当）・事務局長	高橋 誠
理事（産学連携関係担当（関東地区担当））	横田 昭（学外）†
副総長（研究・学生支援関係担当）	國枝 秀世
副総長（産学官・病院経営関係担当）	松尾 清一
副総長（評価・総合企画関係担当）	松下 裕秀

監事	熊田 一充（学外）
監事	浅野 良裕（学外）†
審議役	宮田 隆司 †
参与	金田 新（学外）†
参与	山田 直（学外）†
参与	林 光佑（学外）†
参与	伊藤 勝基（学外）†
参与	出村 祥雄（学外）†
参与	小川 宏嗣（学外）†
参与	房村 精一（学外）†

†印は非常勤

経営協議会委員

学外委員

トヨタ自動車株式会社代表取締役副社長	内山田竹志
前学習院大学経済学部教授	奥村 洋彦
中部電力株式会社相談役	川口 文夫
大学共同利用機関法人情報・システム研究機構理事	郷 通子
株式会社中日ドラゴンズ代表取締役社長	坂井 克彦
東レ株式会社代表取締役会長	榊原 定征
名古屋経済大学長	佐々木雄太
日本ガイシ株式会社相談役	柴田 昌治
愛知県病院事業庁長（愛知県がんセンター名誉総長）	二村 雄次
日本アイ・ピー・エム株式会社取締役会長	橋本 孝之

(五十音順)

学内委員

総長	濱口 道成
理事	杉山 寛行
理事	山本 一良
理事	藤井 良一
理事	鮎京 正訓
理事	渡辺 芳人
理事	高橋 誠
副総長	國枝 秀世
副総長・医学部附属病院長	松尾 清一
副総長	松下 裕秀

教育研究評議会評議員

総長	濱口 道成
理事	杉山 寛行
理事	山本 一良
理事	藤井 良一
文学研究科長	木俣 元一
教育発達科学研究科長	早川 操
法学研究科長	定形 衛
経済学研究科長	木村 彰吾
情報文化学部長	川口 潤
理学研究科長	篠原 久典
医学系研究科長	高橋 雅英
工学研究科長	鈴置 保雄
生命農学研究科長	前島 正義
国際開発研究科長	藤川 清史
多元数理科学研究科長	木村 芳文
国際言語文化研究科長	前野みち子
環境学研究科長	溝口 常俊
情報科学研究科長	大西 昇
創薬科学研究科長	松下 裕秀
環境医学研究所長	澤田 誠
太陽地球環境研究所長	松見 豊

エコトピア科学研究所長	田中 信夫
附属図書館長	佐野 充
医学部附属病院長	松尾 清一
総合保健体育科学センター長	池上 康男
文学研究科	周藤 芳幸
教育発達科学研究科	松田 武雄
法学研究科	小畑 郁
経済学研究科	根本 二郎
理学研究科	杉山 直
医学系研究科	藤本 豊士
工学研究科	水谷 法美
生命農学研究科	柘植 尚志
国際開発研究科	成田 克史
多元数理科学研究科	菅野 浩明
国際言語文化研究科	藤井たぎる
環境学研究科	渡邊誠一郎
情報科学研究科	坂部 俊樹
創薬科学研究科	人見 清隆
教育研究共同施設連合選出	町田 健
教育研究共同施設連合選出	伊藤 義人

総長補佐

教育担当、評価担当	戸田山和久
施設整備担当	谷口 元
労働安全担当	村田 静昭
研究・教育支援担当	松村 年郎
男女共同参画担当	東村 博子
防災担当	鈴木 康弘
人事労務担当	市橋 克哉
法務担当	丸山絵美子
人権担当	福澤 直樹
人権（苦情処理）担当	渡部美由紀
国際化拠点整備担当	遠藤斗志也
国際交流担当	宇田川幸則

部局長等

本部		
事務局	事務局長	高橋 誠
総務部	総務部長	堀内 敦
	総務課長	澤田 利夫
	基金推進主幹	廣川 光之
	人事課長	長谷川靖彦
	人事主幹	上野 哲也
	職員課長	大矢 淳一
	財務部	財務部長
財務課長		廣岡 信行
財務調整主幹		河合 泰和
経理・資産管理課長		市川 真康
契約課長		合田由美子
研究協力部	研究協力部長	横山 正樹
	研究支援課長	加藤 滋
	社会連携課長	富田 博明
国際部	国際部長	勝平 宏
	国際企画課長	野田 昭彦
	国際連携主幹	小崎 光芳
	国際学生交流課長	出口 秀典
施設管理部	施設管理部長	西尾 和幸
	施設企画課長	吉村 元晴
	施設整備課長	青木 浩史
	施設管理課長	井上 康彦
	環境安全支援課長	林 清
学務部	学務部長	一居 利博
	学務企画課長	丸岡 充
	教養教育院事務主幹	中濱 定美
	学生総合支援課長	社本 庄司
	入試課長	吉見日出明

社会連携・社会貢献担当、資産活用担当	家森 信善
財務担当	寺崎 浩子
研究推進担当	渡辺 正実
研究推進担当、総合企画調査担当	藤巻 朗
研究推進担当	門松 健治
産学官連携担当	財満 鎮明
産学官連携担当	齋藤 永宏
産学官連携担当	水野 正明
鶴舞地区担当、評価担当	植村 和正
総合企画調査担当	大屋 雄裕
総合企画調査担当	長谷川好規

運営支援組織	産学官連携推進本部長	松尾 清一
	国際交流協力推進本部長	渡辺 芳人
	情報連携統括本部長	山本 一良
	情報推進部長	櫻井 清隆
	情報推進課長	福田 典正
	情報基盤課長	瀬川 午直
	環境安全衛生推進本部長	藤井 良一
	防災推進本部長	鮎京 正訓
	施設計画推進室長	谷口 元
	核燃料管理施設長	井口 哲夫
	評価企画室長	松下 裕秀
	ハラスメント相談センター長	石黒 洋
	社会連携推進室長	家森 信善
	災害対策室長	飛田 潤
	男女共同参画室長	東村 博子
	法務室長	丸山絵美子
	広報室長	渡辺 芳人
	リスク管理室長	鮎京 正訓
	総合企画室長	松下 裕秀
	総合企画室主幹	宮崎 洋介
研究推進室長	藤巻 朗	
監査室	監査室長	鮎京 正訓
	監査室主幹	斉藤 肇
教養教育院	教養教育院長	山本 一良
高等研究院	高等研究院長	近藤 孝男
文学研究科・文学部	文学研究科長・文学部長	木俣 元一
	附属日本近現代文化研究センター長	藤木 秀朗
	教育発達科学研究科長・教育学部長	早川 操
教育発達科学研究科・教育学部	附属中学校長	大谷 尚
	附属高等学校長	大谷 尚
法学研究科・法学部	法学研究科長・法学部長	定形 衛
	附属法情報研究センター長	松浦 好治
経済学研究科・経済学部	経済学研究科長・経済学部長	木村 彰吾
	附属国際経済政策研究センター長	多和田 眞

文系事務部	事務部長	土井 悟	環境学研究科	環境学研究科長	溝口 常俊	
	総務課長	樋田 浩和		附属地震火山研究センター長	山岡 耕春	
	経理課長	齋藤 勝行		附属交通・都市国際研究センター長	林 良嗣	
	教務課長	内出 裕之		環境学研究科・地球水循環研究センター事務長	長尾 義則	
情報文化学部	情報文化学部長	川口 潤	情報科学研究科	情報科学研究科長	大西 昇	
	情報文化学部・情報科学研究科事務長	苗島 実		附属組込みシステム研究センター長	高田 広章	
理学研究科・理学部	理学研究科長・理学部長	篠原 久典	創薬科学研究科	創薬科学研究科長	松下 裕秀	
	附属臨海実験所長	澤田 均		創薬科学研究科・細胞生理学研究センター事務室長	虎澤 千恵	
	附属南半球宇宙観測研究センター長	福井 康雄	環境医学研究所	環境医学研究所長	澤田 誠	
	附属構造生物学研究センター長	遠藤 斗志也		附属近未来環境シミュレーションセンター長	村田 善晴	
	附属タウ・レプトン物理研究センター長	國枝 秀世	太陽地球環境研究所	太陽地球環境研究所長	松見 豊	
	理学部・理学研究科・多元数理科学研究科事務長	河本 達吾		附属ジオスペース研究センター長	荻野 瀧樹	
医学系研究科・医学部	医学系研究科長・医学部長	高橋 雅英	エコトピア科学研究所	エコトピア科学研究所長	田中 信夫	
	附属医学教育研究支援センター長	門松 健治		研究所事務部	事務部長	谷口 哲也
	附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター長	高橋 隆			総務課長	伊藤 秀樹
	医学部附属病院長	松尾 清一	経理課長		引字 勝美	
	医学部・医学系研究科事務部長	塩崎 英司	附属図書館	附属図書館長	佐野 充	
	事務部次長	高下 一磨		医学部分館長	大磯ユタカ	
	総務課長	曾谷 祐一		研究開発室長	松浦 好治	
	人事労務主幹	坪井 直志		附属図書館事務部長	加藤 信哉	
	学務課長	大脇申子男		課長	高木 昭	
	経営企画課長	永家 清考		情報管理課長	高島 学	
	経理課長	安田 浩明	情報サービス課長	岡部 幸祐		
	施設管理主幹	祖父江信和	情報システム課長（事務取扱）	加藤 信哉		
	医事課長	仲井 精一	共同利用・共同研究拠点	地球水循環研究センター長	中村 健治	
	医療サービス課長	中西 達公		情報基盤センター長	伊藤 義人	
	大幸地区事務統括課長	山下 啓二	学内共同教育研究施設等	アイソトープ総合センター長	本間 道夫	
工学研究科・工学部	工学研究科長・工学部長	鈴置 保雄		遺伝子実験施設長	石浦 正寛	
	附属プラズマナノ工学研究センター長	堀 勝		留学生センター長	町田 健	
	附属材料バックキャストテクノロジー研究センター長	河本 邦仁		物質科学国際研究センター長	巽 和行	
	附属計算科学連携教育研究センター長	笹井 理生		高等教育研究センター長	早川 義一	
	附属複合材工学研究センター長	石川 隆司		農学国際教育協力研究センター長	山内 章	
	附属マイクロ・ナノメカトロニクス研究センター長	福田 敏男		年代測定総合研究センター長	中村 俊夫	
	工学部・工学研究科事務部長	小林 照夫		博物館長	吉田 英一	
	総務課長	山内 公文		発達心理精神科学教育研究センター長	松本真理子	
	社会連携主幹	大江 尚美		法政国際教育協力研究センター長	市橋 克哉	
	経理課長	佐田 隆昭	生物機能開発利用研究センター長	川北 一人		
生命農学研究科・農学部	生命農学研究科長・農学部長	前島 正義	シンクロトロン光研究センター長	馬場 嘉信		
	附属フィールド科学教育研究センター長	柳沼 利信	基礎理論研究センター長	野尻 伸一		
	附属鳥類バイオサイエンス研究センター長	松田 洋一	現象解析研究センター長	飯嶋 徹		
	農学部・生命農学研究科事務長	杉浦 良幸	グリーンモビリティ連携研究センター長	小野木克明		
総合保健体育科学センター	総合保健体育科学センター長	池上 康男	減災連携研究センター長	福和 伸夫		
素粒子宇宙起源研究機構	素粒子宇宙起源研究機構長	益川 敏英	細胞生理学研究センター長	藤吉 好則		
国際開発研究科	国際開発研究科長	藤川 清史	大学文書資料室長	池内 敏		
多元数理科学研究科	多元数理科学研究科長	木村 芳文	学生相談総合センター長	杉山 寛行		
国際言語文化研究科	国際言語文化研究科長	前野みち子	全学技術センター	全学技術センター長	藤井 良一	

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
1 東京大学インド事務所開設記念セミナーに出席した渡辺理事は「食事の問題が解決すれば留学生を巡る問題はかなり解消する」と指摘する	3.16 (金)	読売
2 柔道教育の指導のあり方を考える勉強会で内田 良教育発達科学研究科准教授が講演	3.16 (金)	読売
3 広がるトリ科学—国際鳥類内分泌学シンポジウムに向けて—「卵黄の起源と抗体」村井篤嗣生命農学研究科准教授	3.16 (金)	岐阜
4 外国人の日本国籍取得に関して浅川晃広国際開発研究科講師の調査が参照される	3.16 (金)	毎日 (朝刊)
5 減災連携研究センターは企業からの協力を得て3寄附研究部門を新設する	3.16 (金)	読売
6 日経実力病院調査：医学部附属病院の膵臓がん治療の実績が取り上げられる	3.16 (金)	日経 (夕刊)
7 博物館イベント「海藻標本を作ってみよう！」開催：31日	3.17 (土)	中日 (朝刊)
8 「骨抜き派遣法改正に抗議する集会」開催：22日 和田 肇法学研究科教授が講演	3.18 (日)	中日 (朝刊)
9 中日文化センター新講座：「日本の憲法、世界の憲法」本 秀紀法学研究科教授	3.18 (日)	中日 (朝刊)
10 現代日本誤百科 (588)：「元気をもらう」町田 健文学研究科教授	3.19 (月)	中日 (朝刊)
11 福井康雄理学研究科教授は二重らせん星雲がブラックホールから噴出したジェットの残骸であることを突き止めた	3.19 (月) 3.21 (水)	中日 (朝刊) 読売
12 全学教育棟の壁面のパブリックアートが紹介される	3.19 (月)	中日 (朝刊)
13 第87回中部科学技術センターフォーラム開催：29日 社本英二工学研究科教授が「これからのものづくりを支える超精密技術を目指して」と題して講演	3.19 (月)	日刊工業
14 吉川史隆医学系研究科教授と堀 勝工学研究科教授の研究チームは特殊な装置で発生させたプラズマを卵巣がん照射し、がん細胞だけを細胞死させることに成功	3.20 (火)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
15 武田一哉情報科学研究科教授らの研究グループは富士通株式会社と共同で通話内容を分析し過信に陥っている状態を検出する技術を開発	3.20 (火)	日刊工業 他3社
16 高橋 隆医学系研究科教授は肺がん細胞の増殖に今まで働きがわかっていなかった遺伝子が深く関わっていることを突き止めた	3.20 (火)	朝日 (朝刊)
17 現代日本誤百科 (589)：「風邪が喉から来る」町田 健文学研究科教授	3.20 (火)	中日 (朝刊)
18 安田孝美情報科学研究科教授は株式会社エヌ・ティ・ティドコモ東海支社と共同で開発したモバイルガイドシステムの実用化に向けた実験を名古屋市科学館天文展示室で行った	3.20 (火) 3.22 (木)	日経 (朝刊) 中日 (朝刊)
19 名古屋大学オープンレクチャー開催：23日	3.20 (火)	毎日 (朝刊)
20 名古屋大学オープンカレッジが開催され参加者40名が中部シンクロトン光利用施設を見学	3.20 (火)	中日 (朝刊)
21 大塚 仁本学名誉教授が朝日大学で同大学法学部の模擬法廷改修を記念し「私の刑法学」と題して講演	3.20 (火)	中日 (岐阜版)
22 学生之新聞：編集後記 河村知拓さん本学学生	3.20 (火)	中日 (朝刊)
23 現代日本誤百科 (590)：「川を隔てて一衣帯水のかなた」町田 健文学研究科教授	3.21 (水)	中日 (朝刊)
24 小寺泰弘医学系研究科教授が胃がんの最新治療について語る	3.22 (木)	朝日 (朝刊)
25 耕論：秋入学は日本を救うか 本学の秋入学に対する姿勢が取り上げられる	3.22 (木)	朝日 (朝刊)
26 数理ウェブ開催：24日「無限大の可能性」大沢健夫多元数理科学研究科教授、「確率0の現象」伊師英之同准教授	3.22 (木)	中日 (朝刊)
27 第62回愛知県高等学校野球大会名古屋地区一次予選：教育学部附属高等学校が東郷高校に1-11で敗れる	3.22 (木)	読売 朝日 (朝刊)
28 本学など国立8大学は八大学工学系連合会を発足させ、人材育成や工学教育の課題に取り組む	3.23 (金)	日刊工業
29 日経実力病院調査：医学部附属病院のカテーテル治療の実績が紹介される	3.23 (金)	日経 (朝刊)
30 京都産業大学は京都市の中心部に「むすびわざ館」を開設し、益川敏英本学名誉教授が塾頭をつとめる益川塾のセミナーやシンポジウム、市民講座ほかを開く	3.23 (金)	日刊工業
31 川合伸幸情報科学研究科准教授らの研究チームは怒りを感じた人が謝罪されると不快感は残るものの相手を攻撃しようとする衝動は抑えられることを突き止めた	3.23 (金) 3.24 (土) 3.28 (水)	中日 (夕刊) 朝日 (夕刊) 日経 (朝刊)
32 竹下享典医学部附属病院講師らの研究グループはストレスが生活習慣病につながる仕組みを解明	3.24 (土)	日経 (夕刊)
33 博物館イベント ミクロの探検隊「草はらのムシを電子顕微鏡で見よう」開催：4月14日	3.24 (土) 3.30 (金)	中日 (朝刊) 読売
34 ブッダをたずねて 国立民族学博物館名誉教授 立川武蔵氏本学卒業生	3.24 (土)	中日 (朝刊)
35 附属図書館に韓国国際交流財団が図書を寄贈	3.25 (日)	中日 (朝刊)
36 地域医療シンポジウム「災害時の地域医療について語ろう」開催：11日 松尾清一医学部附属病院長がパネリストとして出席	3.25 (日)	中日 (朝刊)
37 中村佳朗工学研究科教授は政府の国際戦略総合特区に指定された中部地方が航空宇宙産業をどのように育成していくべきかを語る	3.25 (日)	読売
38 「第4回 HOPE ミーティング」が開催され小林 誠本学特別教授、野依良治同特別教授らが講演	3.25 (日)	読売
39 高橋寛明さんは本学から編入し北陸先端科学技術大学院大学スーパードクタープログラムを利用して4年間で博士号を取得した	3.25 (日)	中日岐阜版

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
40 2011年度スポーツ奨励賞受賞 鈴木亜由子さん本学学生	3.25 (日)	中日 (朝刊)
41 現代日本誤百科 (592) : 「ご説明を申し上げます」 町田 健文学研究科教授	3.26 (月)	中日 (朝刊)
42 本学と広島大学、海洋研究開発機構などの研究グループは房総半島南端から南東に百数十キロ以上離れた太平洋の海底に長大な二つの活断層が存在することを突き止めた	3.26 (月)	中日 (朝刊) 日経 (夕刊)
43 中嶋哲彦教育発達科学研究科教授は4月から施行される大阪府の教育関連条例に関して「危険といわざるを得ない」と語る	3.26 (月)	中日 (朝刊)
44 平成23年度卒業式が開催され濱口総長が祝辞を述べる	3.26 (月)	中日 (夕刊)
45 医人伝：学生たちに研究の魅力を説く 高橋 隆医学系研究科教授	3.27 (火)	中日 (朝刊)
46 大俣友佳さん情報文化学部学生ほか第8回キャンパスベンチャーグランプリで特別賞・TDK賞を受賞する	3.27 (火)	日刊工業
47 本学が加入している中部経済連合会に新たに大学関連の5法人が加わる	3.27 (火)	日経 (朝刊)
48 留学生センターの留学生の就職活動に関する指摘が取り上げられる	3.27 (火)	日経 (夕刊)
49 現代日本誤百科 (593) : それは「絶対的にいけない」 町田 健文学研究科教授	3.28 (水)	中日 (朝刊)
50 現代日本誤百科 (594) : 「発しさせる」 町田 健文学研究科教授	3.29 (木)	中日 (朝刊)
51 篠原久典理学研究科教授らの研究グループはフラレンを記憶装置として使うことができる可能性があることを突き止めた	3.29 (木)	中日 (朝刊)
52 文部科学省「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業」の中間評価で本学はS、A-Dの5段階でAランク	3.29 (木)	読売
53 東京大学「入学時期の在り方に関する懇談会」が秋入学全面移行の最終報告を答申、本学は静観の構え	3.29 (木)	中日 (夕刊)
54 2011年英科学誌ネイチャー掲載研究論文数 本学は66位	3.30 (金)	日刊工業
55 紙つぶて：科学の方法 篠原久典理学研究科教授	3.29 (木)	中日 (夕刊)
56 本学は2013年4月に複合材の研究拠点「ナショナルコンポジットセンター」を設置する	3.30 (金) 4.10 (火)	中日 (朝刊) 日刊工業
57 クローズアップ：中学武道必修化 内田 良教育発達科学研究科准教授の柔道死亡事故調査が取り上げられる	3.30 (金)	毎日 (朝刊)
58 附属図書館 2012年新入生歓迎展示会「貴重書コレクションー時を越える贈り物ー」開催：4月5日	3.30 (金)	読売
59 名古屋市科学館特別展「OCEAN！海はモンスターでいっぱい」開催：3月17日～6月10日 観察会「アサリから学ぶ生命進化の謎」：4月14日 大路樹生博物館教授が講師を務める	3.30 (金) 4.15 (日)	読売 読売
60 日経実力病院調査：医学部附属病院の関節リウマチの治療実績が取り上げられる	3.30 (金)	日経 (朝刊)
61 海陽中等教育学校第一期卒業生進学先 本学2名	3.30 (金)	朝日 (朝刊)
62 名古屋ムジークフェライン管弦楽団演奏会開催：15日 本学交響楽団出身者ほかで結成されたアマチュアオーケストラが演奏する	3.31 (土)	中日 (朝刊)
63 蓮如の絆：田代俊孝医学研究科非常勤講師	3.31 (土)	中日 (朝刊)
64 深読み先読み：濱口総長が本学の中部経済連合会連加入について語る	4. 1 (月)	朝日 (朝刊)
65 病院の実力：脳腫瘍 医学部附属病院の実績が取り上げられる	4. 1 (月)	読売
66 現代日本誤百科 (595) : 出席者は「千人を数えた」 町田 健文学研究科教授	4. 2 (火)	中日 (朝刊)
67 本学ほか9大学にあるスーパーコンピュータが「京」を中核にネットワークでつながった高速計算機網が完成する	4. 2 (火)	日経 (朝刊)
68 現代日本誤百科 (596) : 「写真撮影は固くお断り」申し上げます 町田 健文学研究科教授	4. 3 (水)	中日 (朝刊)
69 川崎浩司工学研究科准教授は中部電力浜岡原子力発電所の災害対策について「大切なのは多重の対策をとること」と語る	4. 3 (水)	朝日 (朝刊)
70 廣畑幹人工学研究科助教の「銅橋溶接部の腐食特性および防食劣化特性に関する実験的研究」がスガウエザリング技術振興財団研究助成先として採択される	4. 3 (水)	日刊工業
71 こころの玉手箱：益川敏英本学特別教授が故坂田昌一本学名誉教授の教えについて語る	4. 3 (水)	日経 (夕刊)
72 ひと輝いて：名古屋市科学館のプラネタリウム解説者 野田 学氏本学大学院修了生	4. 3 (水)	毎日 (朝刊)
73 こころの玉手箱：益川敏英本学特別教授が古書について語る	4. 3 (水)	日経 (夕刊)
74 現代日本誤百科 (597) : 「参加するかは」 白紙 町田 健文学研究科教授	4. 4 (木)	中日 (朝刊)
75 大路樹生博物館教授がウミユリについて語る	4. 4 (木)	読売
76 こころの玉手箱：益川敏英本学特別教授が理学部時代の仲間について語る	4. 4 (木)	日経 (夕刊)
77 現代日本誤百科 (598) : 部屋は「鍵が開いた」状態 町田 健文学研究科教授	4. 5 (金)	中日 (朝刊)
78 東田和弘博物館准教授がサンゴについて語る	4. 5 (金)	読売
79 本学と東京大学の共同チームは暗黒物質の分布が宇宙全体に及んでいることを突き止めた	4. 5 (金)	日刊工業
80 豊田商工会議所、豊田工業高等専門学校、豊田市が中小企業支援のために「とよたイノベーションセンター」を設置し、本学ほかと連携する	4. 5 (金)	朝日 (朝刊)
81 「中部の環境を考える会」例会開催：14日 青木聡子環境学研究科講師が報告	4. 5 (金)	読売
82 益川敏英本学特別教授が名古屋空襲について語る	4. 5 (金)	読売

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
83 春の園遊会招待者：赤崎 勇本学特別教授	4. 5 (金)	読売
84 こころの玉手箱：益川敏英本学特別教授は物理学教室の「E研」について語る	4. 5 (木)	日経 (夕刊)
85 平成24年度入学式が開催され、瀧口総長が祝辞を述べる	4. 5 (木) 4. 6 (金)	中日 (夕刊) 毎日 (朝刊) 日経 (朝刊)
86 紙つぶて：宇宙エレベーター 篠原久典理学研究科教授	4. 5 (木)	中日 (夕刊)
87 読売農学賞の授賞式が開催され生源寺眞一生命農学研究科教授が出席	4. 6 (金)	読売
88 徳永智春工学研究科助教の研究がパロマ環境技術開発財団の研究助成先に採択された	4. 6 (金)	中日 (朝刊)
89 本学ほか中部地方7大学医学部は先端医療技術開発を目指し連携する「中部先端医療開発円環コンソーシアム」を設立	4. 7 (土) 4.11 (水)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊) 日経 (朝刊) 日刊工業
90 物理学ルネサンス：アタカマ高地で宇宙創成期の急膨張証明をめざす電波望遠鏡として本学のNANTEN2が取り上げられる	4. 8 (日)	日経 (朝刊)
91 福和伸夫減災連携研究センター教授は南海トラフ巨大地震に関する推計について「怖いのは逃げ道を塞ぐこと」、山岡耕春地震火山・防災研究センター教授は「今回の数字で『この避難所は使えない』などとすぐに判断せず詳細なデータを見てから具体的な対応を冷静に考えて欲しい」と語る	4. 8 (日)	朝日 (朝刊)
92 西尾市岩瀬文庫の全調査 塩村 耕文学研究科教授	4. 7 (土)	朝日 (朝刊)
93 本学のサークル「おうちプロジェクト」のメンバーが「ドナルド・マクドナルド・ハウス なごや」を医学部附属病院に開設するための募金活動を行った	4. 8 (日)	朝日 (朝刊)
94 創造性豊かな中学生の育成を目的とする「創造性の育成塾」の春季総会が開催され小林 誠本学特別教授が出席	4. 8 (日)	読売
95 文学部近現代史研究会例会開催：14日 杉浦由香里さん本学大学院生が報告	4. 7 (土)	中日 (朝刊)
96 本学学生ほか大学生が企画立案し賛同する市民や企業から寄附を募り、高校生のインターンシップ支援に使うプロジェクト「チャレンジフォーチャレンジ」が紹介される	4. 7 (土)	朝日 (朝刊)
97 現代日本誤百科 (599)：オリンピック「出場は夢と消えた」町田 健文学研究科教授	4.10 (火)	中日 (朝刊)
98 東村博子生命農学研究科准教授らのグループはエストロゲンが脳に働きかけ排卵を促進する仕組みを明らかにした	4.10 (火)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
99 西澤典彦工学研究科准教授らは、タンパク質結晶の3次元イメージングに成功	4.10 (火)	日刊工業
100 長谷川幸治医学系研究科准教授の設立した「骨バンクネットワーク東海」の取組みが紹介される	4.10 (火)	中日 (朝刊)
101 東海学生陸上競技春季大会：平岡 悠さん本学学生 3000メートル障害 1位	4.10 (火)	朝日 (朝刊)
102 乳がん相談会&親睦会開催：22日 角田伸行医学部附属病院講師が質問に答える	4.10 (火)	中日 (朝刊)
103 パーキンソン病医療講演会開催：14日 平山正昭医学系研究科准教授が講演	4.10 (火)	中日 (朝刊)
104 現代日本誤百科 (600)：「税制など大胆にリセット」町田 健文学研究科教授	4.11 (水)	中日 (朝刊)
105 本学、東京大学、国立遺伝学研究所などの共同研究チームはハボンという姓をもつスペイン人のDNA鑑定を行い日本との関係を探る研究プロジェクトをはじめ	4.11 (水)	読売
106 平成24年度科学技術分野の文部科学大臣表彰 若手科学者賞：佐藤浩太郎工学研究科准教授、廣井 悠減災連携研究センター准教授	4.11 (水)	読売
107 東海テレビ放送番組審議会委員に福和伸夫減災連携研究センター教授を再任	4.11 (水)	中日 (朝刊)
108 本学留学生が八代流いけばな展に出品	4.11 (水)	中日 (朝刊)
109 紙つぶて：プレゼンの名手 篠原久典理学研究科教授	4.12 (木)	中日 (夕刊)
110 医学部附属病院は中部経済産業局が設立する「中部医療産業化ネットワーク」に協力する	4.13 (金)	朝日 (朝刊)
111 数理ウェブ開催：28日「数の分解と関数の分解」大沢健夫多元数理科学研究科教授	4.13 (金)	中日 (朝刊)
112 第16回博物館特別展「大モンゴル展」開催：3月17日～8月31日	4.13 (金)	中日 (朝刊)
113 博物館特別講演会「草原に埋もれた宝を求めて」開催：14日	4.13 (金)	中日 (朝刊)
114 若手研究者の就職支援に関する本学の取り組みが紹介される	4.13 (金)	中日 (朝刊)
115 訃報：池谷和夫本学名誉教授	4.13 (金)	日刊工業 読売 中日 (朝刊)
116 茂登山清文情報科学研究科准教授が中川運河について解説	4.14 (土)	朝日 (夕刊)
117 安心・安全・快適なまちづくりのための勉強会開催：22日 中田 實本学名誉教授が「これからのコミュニティがめざすもの」と題して話す	4.14 (土)	中日 (朝刊)
118 物理学ルネサンス：「反粒子」消滅のナゾ、解明へ 飯嶋 徹現象解析研究センター教授は加速器「スーパー KEKB」での実験での可能性について期待する	4.15 (日)	日経 (朝刊)
119 金城学院大学長奥村隆平氏元本学教授は着任の抱負を述べる	4.15 (日)	中日 (朝刊)

第53回名大祭を6月7日(木)～10日(日)に開催

第53回名大祭が、6月7日(木)～10日(日)に東山キャンパスで行われます。

今年のテーマは「歩けばそこに未知がある」です。

多種多様な企画をご用意しておりますので、皆様お誘いあわせの上、ご来場ください。

第53回名大祭 「歩けばそこに未知がある」

開催日程：6月7日(木)～10日(日)

会場：名古屋大学東山キャンパス

最寄駅：地下鉄名城線名古屋大学駅下車

(お越しの際は公共交通機関をご利用ください。)

●講演会企画

「あなたを磨く3つ指針～大学×企業×国家～」

「いま現在、必要な人材」をテーマに大学、企業、国家の3つの立場から意見を出し合い、現在日本で起こっている問題の解決法や今後の展望を探ります。

講師：名古屋大学職員

舟橋 正剛 氏 (文具印章用品メーカー社長)

本間 政雄 先生

(立命館アジア太平洋大学副学長 (元文部省))

日時：6月9日(土)14:00～

場所：IB電子情報館 中棟2階 IB大講義室

現在、事前応募受付中です。詳細は「名大祭」で検索の上ご応募ください。

●環境への取り組み

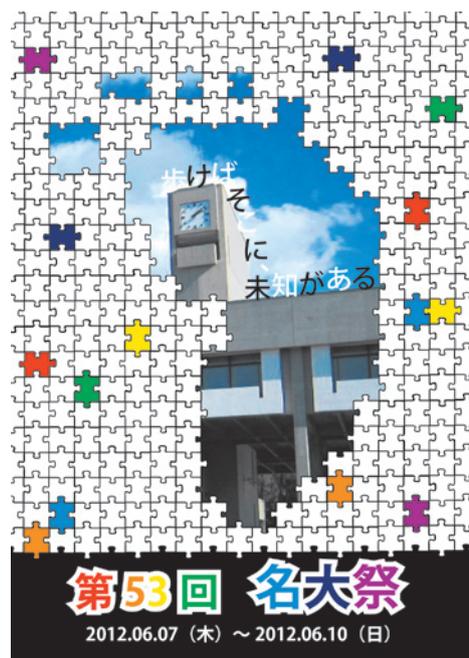
名大祭の模擬店では、環境に配慮した間伐材割り箸を使用しています。さらに、ペットボトルキャップを回収し、ワクチンに換えて途上国に送るボランティア活動にも参加しています。皆様もご協力をお願いします。

第53回名大祭における食品の取扱いについて

平成20年度に行われた第49回名大祭において、食中毒の発生という重大な事故を招いてしまい、多くの関係者の皆様方に多大なるご迷惑をおかけいたしましたこと、改めて心よりお詫び申し上げます。

第53回名大祭におきましても、第52回名大祭の模擬店衛生管理体制の見直し・改善・強化を行った上、昨年度同様の店舗数を維持し、より充実した出店者に対する衛生説明会をあわせて実施することで、さらなる万全な模擬店運営システムの確立に名大祭本部実行委員会一同努めております。

皆様に安心して名大祭を楽しんでいただけるよう、千種保健所のご指導の下、模擬店運営を行ってまいりますので、ご理解のほどよろしくお願いいたします。



●バリアフリーへの取り組み

名大祭では、障がい者、高齢者、妊婦、子ども、子ども連れ、外国人の方も含めたすべての来場者に名大祭を楽しんでもらうために様々な取り組みを実施しています。出来るだけ多くの企画にバリアフリー化にご協力をしていただいたり、障がい者が安心して名大祭を楽しんでもらえるような企画をしたりしています。また、車いすでの来場者の方へ向けた情報を掲載した「車いすマップ」を作成しています。公式HP「meidaisai.com」にも詳細を載せていますので是非ご覧ください。

お問い合わせ

名大祭本部実行委員会

TEL/FAX：052-789-5178

E-mail: mail@meidaisai.com

URL：http://meidaisai.com

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

3月17日(土)～8月31日(金)

場 所：博物館展示室
時 間：10:00～16:00
休 館 日：日・月曜日、
8月11日(土)～14日(火)
入 場 料：無料

第16回博物館特別展「大モンゴル展」

[関連講演会]

場 所：博物館講義室

6月2日(土)

時 間：13:00～14:30

講演題目：「北東アジアにおけるチベット仏教世界の近代」

講 演 者：荒井幸康氏（大東文化大学非常勤講師）

6月9日(土)

時 間：13:30～15:00

講演題目：「モンゴル：その自然と環境」

講 演 者：東田和弘（博物館准教授）

6月16日(土)

時 間：13:00～14:30

講演題目：「子孫の語る榎本武揚」

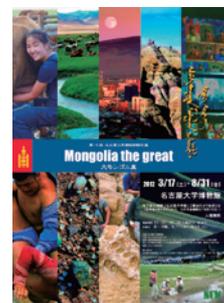
講 演 者：榎本隆充氏（東京農業大学客員教授）

時 間：15:00～16:30

講演題目：「榎本武揚が見た露清関係とモンゴル：シベリア日記を中心にして」

講 演 者：醍醐龍馬氏（大阪大学）

参 加 費：無料



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

4月5日(木)～8月31日(金)

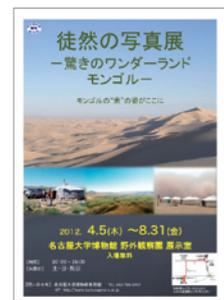
場 所：野外観察園展示室
時 間：10:00～16:00
休 館 日：土・日曜日、祝日
入 場 料：無料

博物館サテライト展示

「徒然の写真展—驚きのワンダーランド モンゴルー—」

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



**5月26日(土)、6月9日(土)、
6月23日(土)、7月7日(土)、
7月21日(土)、8月4日(土)**

場 所：インキュベーション施設1階
プレゼンテーションルーム

時 間：10:00～15:00

ビジネス人材育成センター

平成23年度前期 B人セミナー

テ ー マ：「なぜ、あの人は惚れ惚れするほど、コミュニケーション上手なのか？」(5/26)

「30代のシゴト」、「博士の就活スタート・リスタート」(6/9)

「コンサルティング業界」、「博士・ポストドクのための就職ガイダンス」(6/23)

「製造業における、知財戦略と知財部門の業務内容」、

「プレゼンテーションスキル研修」(7/7)

「再生医療の現状と今後の展望」(7/21)

「ビジネスマナーと企業のルール」、「食品のためのヒト臨床試験業界」(8/4)

[問い合わせ先]

社会貢献人材育成本部

ビジネス人材育成センター 052-747-6490

5月16日(水)、11月24日(土)

場 所：博物館野外観察園、
博物館展示室

時 間：13:00～15:00

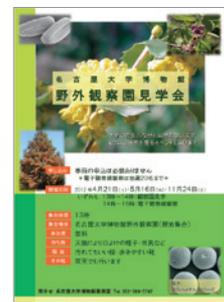
参 加 費：無料

野外観察園見学会

内 容：西田佐知子（博物館助教）他による案内

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

5月26日(土)、6月2日(土)、
6月16日(土)、6月23日(土)、
6月30日(土)

場 所: 博物館講義室

時 間: 10:30~12:00

定 員: 80名

対 象: 一般(基本的に毎回参加できる人)

参 加 費: 無料

名古屋市生涯学習推進センター
大学連携キャンパス講座
「達人(研究者)と話そうーヒトとからだー」

講演題目: 「進化から見るヒトのからだ」(5/26)

講 演 者: 門脇誠二(博物館助教)

講演題目: 「笑って免疫力アップ!」(6/2)

講 演 者: 永井博弐氏(岐阜保健短期大学学長)

講演題目: 「細胞が行うタンパク質の新陳代謝と病気」(6/16)

講 演 者: 山根 隆(本学名誉教授)

講演題目: 「みずみずしい皮膚の源は」(6/23)

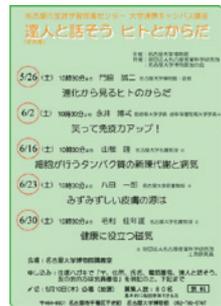
講 演 者: 八田一郎(本学名誉教授)

講演題目: 「健康に役立つ磁気」(6/30)

講 演 者: 毛利佳年雄(本学名誉教授)

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



5月26日(土)

場 所: 博物館展示室

時 間: 14:00~15:00

参 加 費: 無料

博物館コンサート
「知られざる音楽大国 ベネズエラのしらべ
ー国民的楽器クアトロを中心にー」

演奏曲目: 「草原の魂」、「コーヒールンバ」、「アプーレをひと巡り」他

出 演: 「CELESTE (セレステ)」 出口泰司氏、岡野友絵氏

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



【訂正とお詫び】

名大トピックス227号(2012年4月発行)で以下の誤りがありましたので、深くお詫び申し上げますとともに、下記のとおり訂正させていただきます。

227号24ページ・下「名古屋大学で得たこと・抱負」山口 遼 医学部医学科6年

【全文訂正】

6年間の学生生活を通して多くの先生方や先輩方にお世話になり、上から受け取った恩を後輩たちへの指導という形で返そうと努力しました。その過程で教育にかかる準備の大変さと、その苦労を超える喜びを経験しました。またロビンス基礎病理学という教科書の翻訳作業に従事したことで、世界中の人々に自分の知識を伝えて医学の発展に貢献していく可能性を知り、将来は自分の言葉で教科書を執筆しようという目標ができました。

東日本大震災の際には瓦礫処理に従事しましたが、素人ができる作業には限界がありもどかしく感じたことから、医師として努力を重ねて高い専門性を身につけ、災害時に最大限の貢献をしようと強く決意しました。

今後は、最も興味を持った心奇形の分野で一人前の術者となるために、症例の多い海外で修業して教育にも携わりながら心臓血管外科医として成長して、その後は強力な治療手段である心移植を日本に今以上に普及させていきたいです。

227号26ページ・下「ソチオリンピックに向けて」建部 順平

【誤】工学部機械工学科3年

【正】工学部機械・航空工学科3年

名大トピックス No.228 平成24年5月16日発行

編集・発行/名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町(〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

表紙

根本二郎経済学研究
科教授による講義の
様子
(平成24年4月20日)



名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>)でもご覧いただけます。

121 近年の名大祭① — 1990年代 —

今年の第53回名大祭は、6月7日から10日にかけて、「歩けばそこに、未知がある」をテーマに開催されますが、今回は少し時代をさかのぼって、1990年代の名大祭をふりかえてみたいと思います。

90年代の名大祭のテーマを一覧してみますと、前半と後半では傾向の違いがあることが分かります。90年代前半は、80年代後半からの傾向である政治色の希薄化を受け継ぎつつも、自分たちが未熟な存在であると認め、そこから未来を展望するテーマが多いように思われます。

これに対し、90年代後半、とりわけ最後の3年間のテーマは、現状への否定的な評価を背景とする傾向が強まっているようです。いわゆるバブル経済の崩壊により、就職状況が厳しくなっていた時代を反映してのものでしょうか。とくに97年のテーマは、その是非をめぐって物議をかもし、名大祭本部実行委員会と大学が折衝するという事態に至り、新聞にも大きく取り上げられました。

もっとも、80年代から目立ってきたテーマと実際の行事内容の乖離はいつそう進み、「お祭り企画」に分類される行事が増加するなど、名大祭の娯楽化傾向がさらに強まりました。この背景には、80年代後半から問題視されていた、名大祭に参加する学生の減少もあるようです。この時期の実行委員会は、学生をよびもどす魅力のある名大祭を懸命に模索していました。娯楽化は、一面では名大祭に対する危機意識の現れともいえるでしょう。

具体的な企画では、フォークダンス、歌声祭典、子供大会といった、長い歴史を持つものが、いずれも90年に姿を消しました。その一方で、現在の名大祭の代表的な風景になっている、豊田講堂前特設ステージが92年に登場しています。また、フリーマーケットも現在の名大祭における風物詩といえるものですが、これが実行委員会企画としてパンフレットに掲載されるようになったのも92年からです。



回	開催年	テーマ
31	1990	文明の育ての親と生みの親である。
32	1991	未来への足跡
33	1992	腐った鯛、原石のダイヤ
34	1993	卵からかえる瞬間
35	1994	種まいて、水かけて、
36	1995	夢見る頃を過ぎて…今こそ動き出すとき
37	1996	カニ
38	1997	くさった学生。くさった教授。 ～真の大学改革を目指して～
39	1998	崖っぷち
40	1999	0からの創造

第31回名大祭 '90.6.6水～10日



3	2	1
4	5	

- 1990年代の名大祭のテーマ。
- 1990年(第31回)のパンフレットの表紙。この年は、橋本治講演会、猪瀬直樹トークライブ、杉本彩コンサートなどもおこなわれた。
- 1991年(第32回)のファイヤーストーム。中央図書館裏のグラウンドでおこなわれた。
- 1994年(第35回)の仮装行列。この年は、栄の若宮広場から名城公園に至るコースを行進した。
- 「カニ」をテーマとして開催された、1996年(第37回)の豊田講堂前特設ステージ。